

2023年11月1日

みずほディーラーズアイ (2023年11月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 148.50 ~ 152.50

金融市場部 為替営業第二チーム 松永 裕司

■ 先月の為替相場

先月のドル/円相場は、149.52円でオープンすると3日米8月JOLT求人件数の強い結果を受け、昨年10月以来の高値となる150.16円に上昇。直後、強烈な円買いが入り、一時週安値となる147.30円に急落も、すぐに149円付近に値を戻す荒い動きとなった。その後は4日米9月ADP雇用統計の軟調な結果を受け、148円台前半まで下落するなど軟調な動きが続いたが、6日の米9月雇用統計にて非農業部門雇用者数が市場予想比を大幅に上回ると149円台半ばまで上昇した。

第2週目は、週前半こそFRB高官によるハト派な発言を受け、148円台半ばに下落する場面も見られたが、11日の米9月生産者物価指数(PPI)、12日の米9月消費者物価指数(CPI)の強い結果を受け149円台後半を回復。その後も底堅く推移し149円台半ばを維持して越週。

第3週目は149円台半ばでのレンジ推移が続いていたが、17日に日銀が今月末の会合で来年度にかけての物価見通しを上方修正するとの報道を受け、一時週安値の148.75円に急落。しかしすぐに反発すると、米9月小売売上高の強い結果もあり150円を目指す展開に。週半ば以降は149円台後半での推移が継続し、20日に一時週高値となる150円ちょうどをつけるも、直後に149.60円まで下落。

第4週目は、週初23日にオープン直後に150.11円まで上昇するも、すぐさま反落。その後は再び149円台後半で方向感を欠く展開が続いたが、25日の米9月新築住宅販売件数の良好な結果を受けて150円台前半まで上昇すると、翌26日もアジア時間から円売りの流れが優勢となり150.78円を付け年初来高値を更新したが、買いは続かず週後半にかけてじり安となり149円台半ばまで下げた。

第5週目は、31日の日銀会合を前に政策修正期待から149円付近まで下落。日銀会合ではYCCを柔軟化したものの、緩和方針を維持。ドル/円は再び150円台を回復した。

■ 今月の見通し

11月のドル/円は底堅い動きを予想する。
引き続き日米の金融政策の動向が市場の注目を集める中、月初にはFOMCを控える。9月の米CPIは強い結果となり、また米3四半期GDP(速報値)は市場予想を上回る内容となるなど、根強いインフレ圧力と個人消費に支えられ底堅い経済の状況が継続する。そのような環境下でFRBが政策スタンスを転換することは想定しづらく、今後のデータ次第としつつ様子見姿勢を継続するとみる。会合を無難に通過すれば、金融引き締め長期化への思惑からドル/円は底堅い動きが継続しよう。
一方で、ドルを買い進む動きも限られそう。10月に入り米長期金利が一層上昇する中、FRB高官からはこうした動きを警戒する声が広がっており、米金利の上昇余地は小さいとみる。金利差の面からドルが上昇する余地は限られよう。

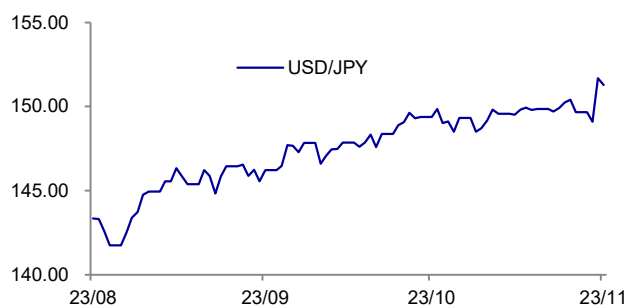
国内要因については、先月末の日銀会合を政策金利据置き、YCCの微修正で終えたこともあり、11月の注目は為替介入のタイミングに移ろう。先月上旬に神田財務官は「一方向に一方的な動きが積み重なって一定期間に非常に大きな動きがあった場合は過度な変動に当たりうる」として緩やかな円安進行であっても介入を排除しない考えを示している。年初来高値を更新するような局面では上値を試すようなドル高の動きには警戒したいが、介入への警戒が引き続きドル/円の重しとなろう。

その他、中東情勢の動向にも注目が集まるが、ドル/円に限って言えば情勢悪化によりリスクセンチメントの悪化は円買い要因になるが、中東情勢の悪化による原油高は円安要因。総じてみれば短期的にはドル/円への影響は限られよう。

月初のFOMCで大きな方針転換がない限りドル/円は、経済指標の結果に一喜一憂しつつも横ばい圏での動きが続こう。

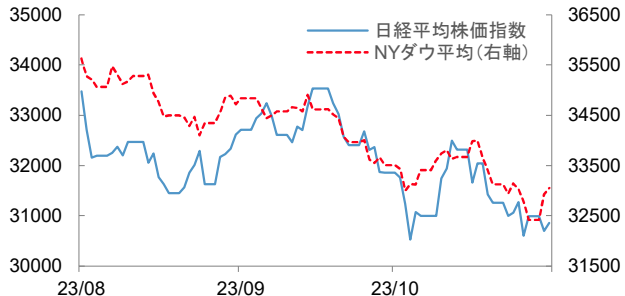
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/2	ISM製造業景況指数	9月	47.9	49.0	47.6
10/3	JOLT求人	8月	8815k	9610k	8827k
10/4	ISM非製造業景況指数	9月	53.5	53.6	54.5
10/6	非農業部門雇用者数変化	9月	170k	336k	187k
10/11	PPI 最終需要(前年比)	9月	1.60%	2.20%	1.60%
10/12	CPI (前年比)	9月	3.60%	3.70%	3.70%
10/17	小売売上高速報(前月比)	9月	0.30%	0.70%	0.60%
10/26	GDP (年率/前期比)	3Q	4.50%	4.90%	2.10%
10/31	日銀金融政策決定会合	-	長短金利操作の柔軟化		

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	14名	153.00 ～ 147.00	ベア	2名	151.00 ～ 145.50
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ブル	154.00 ～ 147.00	本邦からの経常・資本に係る円売りフローが増加傾向となりつつあることや、中銀イベント通過後も日米金利差の劇的な変化は想定しづらく、ドル円の下値は堅い。市場は当局の介入を警戒するも、じわじわと値を上げる展開を予想。	松永	ブル	152.50 ～ 148.50	個人消費に支えられた堅調な米国経済と金融引き締め長期化への思惑からドル円も底堅い動きが継続しよう。ただし、FRB高官が長期金利の上昇を警戒する中、ドル円の上値も限られるとみる。
河合	ブル	152.00 ～ 147.00	先月末の日銀YCC再修正の事前報道を受けたドル円の下落は限定的。日銀よりゼロ金利解除の時期が示されない一方、米国の根強いインフレ懸念・金利高止まりを背景に、ドル円は底堅い展開を予想。ただし、介入警戒感から上値も限定的か。	田川	ブル	152.00 ～ 147.00	日銀を月末にこなし、11月月初のFOMCにサプライズはないと見る。ドル/円はドルが強ければ素直に上昇。ドルが弱い場面ではクロス/円にサポートされて堅調といった「弱い円」という図式は11月の為替市場でも変わらないだろう。
川端	ブル	152.00 ～ 147.00	円金利上昇を受けたYCC再修正はいわば既定路線であり、それ自体の円相場への影響は限定的。インフレ見通しの上昇修正も同様であり、マイナス金利解除期待が高まらない限りは円じり安の展開が継続する。	上遠野	ブル	153.00 ～ 148.00	米金利高止まり状況下での日銀の金融緩和継続スタンスを確認し円安トレンドに変化なし。11月 首脳会談を皮切りに米中の歩み寄り期待や、期限を迎えるつなぎ予算の行方を眺めつつ、好悪材料両面から米金利は上昇圧力が出やすいか。
加藤	ベア	150.00 ～ 145.00	すでにBOJのスタンスは市場に対しニュートラルな姿勢になっていると認識すべきで、米国の景気動向とも考え合わせるとやはりここからドル円の上は重いであろうと考える。	小林	ブル	152.50 ～ 147.00	10月末開催の日銀では、金融政策の緩和姿勢維持が改めて示されたのに対し、米国では堅調な景気を背景に中銀メンバーはタカ派姿勢を維持。ドル円は引き続き上値トライの展開を想定するも、安値圏では引き続き介入警戒要か。
山崎	ベア	152.00 ～ 146.00	BOJにより、YCC運用のさらなる柔軟化が示された。方向感は緩和の撤廃方向ということであれば、一旦は円高方向か。シグナルはそこまで示されていないが、介入警戒感も強く、上値目途は150円台前半か。	逸見	ブル	154.00 ～ 148.00	日銀のYCC修正や介入警戒感がドルの上値を抑えるも、堅調な米経済を背景にFedのハト派化は先伸ばしされており、ドルの底堅さは継続。円の需給環境の弱さに変化の兆しはなく、ドル円は高値を試す展開を想定。
伊藤	ブル	152.00 ～ 145.00	日銀の政策修正による金利上昇が一時的に円安を抑えてはいるが、足元の米国経済の強さを踏まえればFEDがハト派姿勢を崩す可能性は低い。絶対的な日米金利差、実需の買い意欲を鑑みればドル円の下値の堅さは変わらないだろう。	鈴木	ブル	153.00 ～ 147.00	日銀のスタンスが再確認され、円売り基調は継続。高止まりする米金利、堅調な経済環境を受けてタカ派姿勢を崩さないFedとの格差は大きく、介入への警戒感を強めながら、じりじりと上値を試す展開を予想。
尾身	ブル	153.00 ～ 147.00	今月も米国の高い政策金利の維持と、日銀の金融緩和と政策維持によりドル/円はドル高円安傾向が維持されると予想。但し、米国指標の悪化が見られると、ドル売りが強まる局面もあるか。	大熊	ブル	153.00 ～ 147.00	日銀はマイナス金利政策を継続する一方、FOMCでは政策金利据え置きの見方が太宗とはいえないインフレ懸念は熾り、米景気は底堅い為、FRBはタカ派姿勢を維持すると思われ、ドルは底堅く推移すると予想。
山口	ブル	153.00 ～ 148.00	強力な金融緩和を継続する日銀に対し、政策金利を高値圏で維持すると表明しているFed。金融政策の違いが引き続き意識され、ドル円は底堅く推移すると予想。	西	ブル	153.00 ～ 146.00	10月発表の米経済指標は軒並み堅調であり、FEDのタカ派姿勢は崩れそうにない状況。政府・日銀による為替介入は警戒されているものの、下値は固いか。日銀の緩和継続姿勢と絶対的な日米金利差は不変。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0350 ~ 1.0850
EUR/JPY 156.00 ~ 162.00

金融市場部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

■ 先月の為替相場

月初2日のユーロ/ドルは1.0564レベルでオープン。米金利が上昇する中、デギンドスECB副総裁による目先のインフレ鈍化に対し自信を見せる発言が材料視され、1.04台後半に下落すると、3日には一時1.0448まで年初来安値を更新。ただその水準下げ止まると、弱い米経済指標を受けた米金利低下や欧州株の反発を背景に、1.05台を回復。6日の米雇用統計の結果にやや下押し圧力が強まる場面があったものの、その後は米金利の低下を横目に上昇に転じると1.06台ちょうど近辺まで値を上げた。

第2週目9日は1.05台半ばでオープン後、中東の政情不安により欧州株が下落する中で、Fed高官のハト派な発言を受けたドル売り等によりじりじりと上昇。1.06台に乗せると、しばらくは同水準で方向感なく推移。12日に独金利上昇の上昇につられて1.06台半ばまで上昇する場面も見られたが、その後の米9月CPIや米国債入札を受けた米金利上昇を受けて1.05台前半まで反落すると、13日には一時1.05を割り込む水準まで下落するなど、週末にかけては軟調な推移が続いた。

第3週目16日は1.05台前半でオープン後、リスクオフ後退に伴う欧州株高や独金利上昇を背景に、1.05台半ばまで上昇。17日の独10月ZEW景気期待指数の市場予想を上回る結果を材料に1.06手前まで値を上げると、19日にパウエルFRB議長が追加利上げに対し強い示唆を行わなかったことから、米短期金利が低下する流れに合わせ、1.06台を回復。その後は目立った材料のない中、1.05台後半を中心とした推移となった。

第4週目23日は1.05台後半でオープン。海外時間に入るとドル売りが強まり、1.06台後半まで上昇。24日もじり高の展開が続き、一時月間高値となる1.0695をつける。ユーロ/円も一連の流れから年初来高値となる159.90をつけた。ただドイツやユーロ圏の10月PMIが軟調な結果になったことを受け、1.05台後半まで反落。その後は1.05台半ばでの推移が続く中、26日のECB政策理事会での市場予想通りの政策金利据え置きやラガルド総裁の会見内容にやや上下動するも大きなトレンドは出ず。結局1.05台半ばでの推移に落ち着いた。最終週30日はイベントを控えたポジション調整もあってカドル売り優勢の流れに、1.06台を回復。31日はBOJの結果を消化しながら、1.06ちょうど近辺で推移している。

■ 今月の見通し

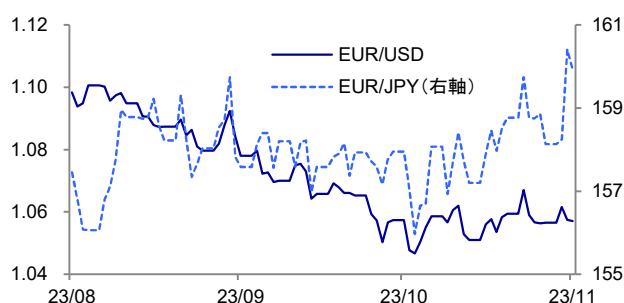
今月のユーロ/ドルは上値の重い推移を基本線とし、場合によっては下値を模索する展開を予想する。

先月のECB政策理事会では2022年7月に利上げを開始して以来、11会合ぶりに利上げの見送りが決定された。その後のラガルド総裁の会見では、「再び利上げしないといったわけではない」といった趣旨の発言等から、追加利上げの可能性を排除していない考えはしきりに強調されていたものの、インフレより景気に重きを置いた政策にシフトした感拭えない。裏を返せばそれだけ景気見通しに不安がある状況な上、エネルギー消費量の高まる冬に向けて、天然ガスの供給や中東リスクによる原油高など、欧州圏内に課題は山積している印象。30日にはユーロ圏の経済の根幹をなすドイツのGDPが市場予想を上回ったものの、前期比マイナスという結果も発表された。金利妙味の剥落に加え、域内の景気見通しが芳しくない状況下、ユーロ買いが進む根拠はそれほど見当たらないと考えている。

一方米国も前回FOMC時には政策金利の据え置きを決定。パウエル議長の会見では、利上げサイクルの終了宣言を明確に否定し、データ次第での追加利上げに含みを持たせるなどタカ派スタンスは維持された。ただ金融引き締めが急速に進む局面においても、賃金動向や個人消費など経済指標の結果により経済的な力強さが示されている現状に、スタンス維持の根拠は一定程度揃っていると思われ、ECBのそれとは似て非なる印象がある。月初に予定されているFOMCの結果や、3日の米10月雇用統計の結果には注視が必要ではあるものの、利上げ余力を含めた両国の金利格差や経済状況の差異を背景に、両通貨を比較すると、よりUSDが好まれる環境にあるといえよう。

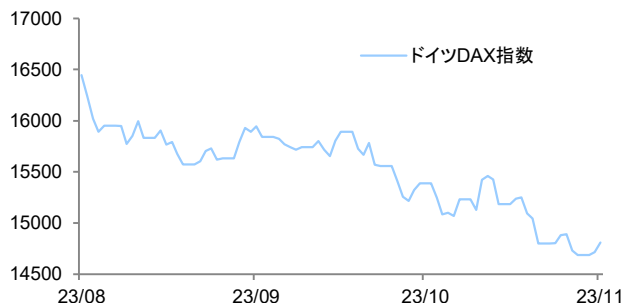
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/17	独ZEW景気期待指数	10月	-9.0	-1.1	-11.4
10/24	独製造業PMI	10月	40.1	40.7	39.6
10/24	ユーロ圏製造業PMI	10月	43.7	43.0	43.4
10/24	ユーロ圏サービス業PMI	10月	48.6	47.8	48.7
10/25	独IFO企業景況感指数	10月	86.0	86.9	85.8
10/25	独IFO期待指数	10月	83.5	84.7	83.1
10/26	ECB主要政策金利	-	4.50%	4.50%	4.50%
10/30	独GDP (前期比)	3Q	-0.2%	-0.1%	0.1%
10/30	独CPI (前年比)	10月	4.0%	3.8%	4.5%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	4名	1.0800 ～ 1.0425	ベア	12名	1.0750 ～ 1.0350
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ベア	1.0750 ～ 1.0200	停滞する欧州の景況感や対照的に継続する底堅い米景況感を背景にユーロの上値は重い。足許、減少傾向ではあるものの投機筋のユーロロングも残存しており、基本的ユーロは選考しづらくユーロベアを予想。	松永	ベア	1.0700 ～ 1.0350	ECBが徐々にインフレから景気に軸足を置いた政策運営にシフトする中、足許の軟調な欧州経済もありユーロは上値の重さが継続しよう。欧州域内の消費縮小、景況感の悪化はユーロの一層の下押し要因となる可能性もあり注目したい。
河合	ベア	1.0750 ～ 1.0400	欧州経済環境の更なる悪化リスクから基本ベアも、10月ECB政策理事会で利上げ見送りが決定され、米欧共に金融政策は転換期入りしており、ユーロドルは方向感の出ないレンジ推移を予想。	田川	ベア	1.0665 ～ 1.0400	ECBではデータ次第と強調したものの、今後の利上げを予想している市場参加者はほぼいない状況。EUR自体に特段のトレードテーマなく、参加者の興味も薄れている状況下、米ドル主導の動きを想定しておきたい。
川端	ブル	1.0800 ～ 1.0400	インフレ鎮静化を背景に事前の地ならし通りにECBは利上げを停止した。欧州域内の不冴えな景況感もあり、当面は様子見と思われるが、FEDも利上げ一服が見込まれる中、戻りは鈍いがレンジ内をじり高。	上遠野	ベア	1.0680 ～ 1.0500	ユーロ圏のスタグフレーション下における中銀の引き締め慎重姿勢を背景にユーロは軟調な展開が続くものと想定。ソフトランディング期待の高まる米国のドル買いも重石。
加藤	ブル	1.0800 ～ 1.0500	米国の拙速な利上げの悪影響、さらにはユーロ圏との財政政策の差が米国景気の押し下げ要因となり相対的にユーロ圏との格差を浮き彫りにしてくると予想する。広範なドル安の影響によりユーロは堅調となろう。	小林	ベア	1.0750 ～ 1.0350	米国では堅調な経済を背景にタカ派スタンスが維持されている一方、欧州圏では地政学リスクに加え、景気の低迷が目立っており、ユーロドルについては引き続き軟調推移を予想。
山崎	ブル	1.0750 ～ 1.0450	ユーロ安の流れも一服か。政策金利の上昇も一旦は踊り場と考えてやや値を戻す流れが続くものと想定。新たな火種からエネルギー価格の上昇も懸念されるが、一旦は上方向を予想したい。	逸見	ベア	1.0800 ～ 1.0200	欧州経済の減速懸念が燦る中、ECBはタカ派になりきれず。声明文からはハト派色が伺える状況下、金利を理由にユーロの浮上は困難であろう。冬にかけてエネルギー問題も意識され、ユーロは軟調推移を予想。
伊藤	ベア	1.0800 ～ 1.0300	ラガルド総裁は引き締め継続の必要性を指摘するが、ECBは景気に重きをおく姿勢に移行しつつある。好調な経済を背景に高い金利を据置く米国とは事情がまったく異なっており、対ドルでの上値の重さを確認することになるだろう。	鈴木	ベア	1.0850 ～ 1.0350	景気見通しの悪化、エネルギー消費量の増える冬に向けた供給問題など、域内に課題は山積。Fedとの金融スタンス格差も明確であり、上値の重い推移を予想する。
尾身	ブル	1.0800 ～ 1.0400	ECBの高い政策金利の維持により底堅い推移が継続すると考えている。但し、米国も高い政策金利を維持しているため、もみ合いが継続し値幅は限定的か。また、利上げ終了に関するニュースでは一時的なユーロ売りが強まりそう。	大熊	ベア	1.0800 ～ 1.0350	足元の経済指標の違いから、欧州と米国の景況格差は鮮明となっている。欧州の景気鈍化が懸念される状況下、中東情勢の緊迫化は更なるユーロ売りに繋がりがやすく、上値重い展開を予想する。
山口	ベア	1.0750 ～ 1.0350	欧州の景気後退が意識されている状況でありながらも、インフレは引き続き高値圏で推移している。ECBが利下げについて議論するには時間がかかると予想されるも、ハト派傾斜を受けEURは上値重く推移すると予想。	西	ベア	1.0800 ～ 1.0300	ECBはインフレ抑制よりも景気に軸足をシフト。力強い経済を背景に年内追加利上げに含みを持たせタカ派姿勢を継続するアメリカとは対照的であり、上値は重い。中東情勢悪化によるエネルギー価格上昇も重石となるだろう。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.1900 ~ 1.2400
GBP/JPY 178.00 ~ 184.00

欧州資金部 中島 將行

■ 先月の為替相場

10月の英ポンド相場は対ドルで上下に振れ幅の大きい展開となったが、1か月を通して見れば対ドル1.21近辺で横ばいの動きとなった。第1週目のポンド相場は週前半はドル安・ポンド高となったが、6日に公表された米9月雇用統計で非農業部門雇用者数が+33.6万人の増加と、市場予想の+17万人増を倍近く上回る結果となり、終盤にポンド安・ドル高が優勢となった。第2週目のポンド相場は7日に発生したパレスチナ自治区ガザを実効支配するイスラム組織ハマスによるイスラエル攻撃という地政学リスクイベントを受けて、週明け直後はドルはポンドを含む欧州通貨に対して上昇したものの、その後は一転してドル売りが広がった。10日のNY市場再開と共に鮮明となった米長期金利低下が影響したものと見られる。中東情勢の緊迫化に伴う安全資産への逃避需要のほか、ダラス連銀のローガン総裁や、ジェファーソンFRB副議長らの発言を受けて、FRBが利上げ見送りに傾いているとの見方が広がった。第3週目のポンド相場は対ドル1.21から1.22の間でほぼ横ばいの展開となった。前週の米9月消費者物価(CPI)に続き、米9月小売売上高が堅調な結果となったことや、米財政政策を巡る不透明感もあり、米長期金利は19日から20日にかけて節目となる5.0%手前まで上昇した。一方、米長期金利上昇に対し、ドル高の勢いは鈍く、スイスフランを筆頭に、対ドルで上昇する通貨もあった。米長期金利が節目の水準に近づくにつれ、米金融環境の逼迫など、高金利による実体経済への下押し圧力がより強く意識されている面もあるだろう。英国の経済指標では、17日に労働市場関連統計、18日には9月CPIが発表され、総じて11月BOE会合での利上げ見送りという見方をサポートする内容となった。第4週目のポンド相場は10月26日にECBの金融政策発表(ほぼサプライズなし)や、7~9月期の米実質GDP成長率(速報、市場予想に対する大幅な上振れ)といった材料をこなしながらも、一週間を通して見ればほぼ対ドル・対ユーロで横ばいの展開となった。英国の経済指標では10月PMI(速報)が注目されたが、結果は製造業が45.2(市場予想44.7)、サービス業が49.2(市場予想49.3)と強弱まちまちであり、市場の反応は限定的だった。第5週目は11月1日にFOMCを控え、ポンドを含む欧州通貨がやや買い戻される展開となっている。

■ 今月の見通し

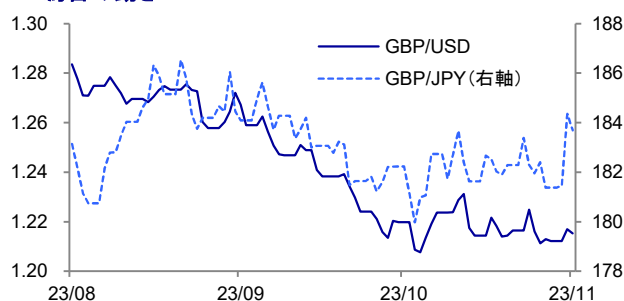
11月は10月に引き続き、英ポンドは方向感の乏しい展開となろう。1日にFOMC、2日にBOEの金融政策発表を控える。2023年7~9月期の米実質GDP成長率をはじめ、米国の経済指標の強さには目を見張るものがあるものの、現時点ではFOMC参加者はこれまでの利上げが実体経済に時間差を伴って聞いてくるのをじっくりと見極める姿勢を示す公算が大きい。一方のBOEについて、今会合でBOEは政策金利を据え置くという見方が市場のコンセンサスとなっているが、サプライズの余地は小さいだろう。9月会合では据え置き票が5に対し、利上げ票が4と僅差で据え置きが決定された。今会合ではタカ派の論客の一人であったカンリフ・BOE副総裁が退任し、ブリーデン氏が新たに参加する。ブリーデン氏の政策姿勢は現時点で明らかではないものの、この1か月に発表された一連の経済統計で賃金・景気の鈍化が確認されたこと、これまでの政策金利の引き上げが時間差を伴って一段と景気へのブレーキとなる可能性を考慮すれば、利上げ票が減ることはあっても増えることはないだろう。BOEは金融政策発表に合わせて新たな経済見通しを公表する。2024年の実質GDP成長率見通し(前年比+0.4%)が引き下げられる一方、スワップカーブに織り込まれた政策金利の引き下げ見通しを反映する形で2025年は若干、増加すると見込まれる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のペット事情』
英国では日本と同様に、犬を飼っている人も、猫を飼っている人も多くいます。ロンドンにはたくさんの公園があり、休日ともなれば犬を連れた人々で賑わいますし、住宅街であればあちこちで猫のくつろいでいる姿を見ることができます。英国人が犬派か猫派かは甲乙つけがたいところですが、「英国で一番有名なペット」と言えば、「首相官邸ネズミ捕獲長」ことラリーではないかと思います。「首相官邸ネズミ捕獲長」は、ダウニング街10番地(イギリス首相の官邸)の公式な飼い猫に与えられる肩書です。元野良猫のラリーは2011年からこの「任務」についており、キャメロン、メイ、ジョンソン、トラス、スナクの5名の首相に仕えています。ラリーには非公式のX(旧ツイッター)アカウントがあり、イギリスの政治や政治家に関するジョークを定期的に投稿しているようです。新型コロナウイルス規制違反の官邸パーティー疑惑を巡り、ジョンソン元首相が「誰も規制違反だと私に注意しなかった」と釈明した際には「ルールを決めたのはおまえだ。注意などいらないはずだ」と言ったり、現首相のスナク氏の首相就任時には「リン・スナクが首相になる。彼の家族は大金持ちだから、明日から僕のメニュー(はキャビアとロブスターだ)、等々。Larry the Cat(@Number10Cat)の名義で検索可能なので、私もフォローしてみようか」と思います。

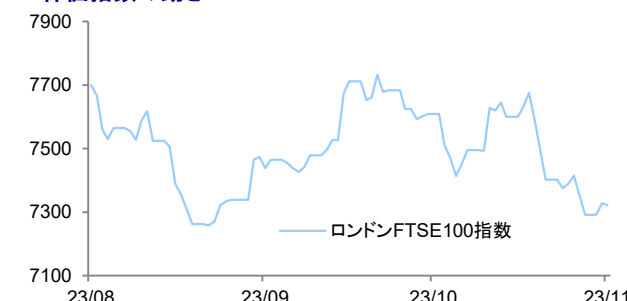
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/2	ネーションワイド住宅価格指数	9月	-5.6%	-5.3%	-5.3%
10/12	RICS住宅指数	9月	-60.0%	-69.0%	-68.0%
10/12	月次GDP	8月	0.20%	0.20%	-0.60%
10/12	鉱業生産(前月比)	8月	-0.1%	-0.7%	-1.1%
10/12	製造業生産(前月比)	8月	-0.3%	-0.8%	-1.2%
10/18	CPI(前年比)	9月	6.6%	6.7%	6.7%
10/20	小売売上高(前月比)	9月	-0.4%	-0.9%	0.4%
10/24	製造業PMI	10月	44.7	45.2	44.3
10/24	サービス業PMI	10月	49.3	49.2	49.3
10/30	住宅承認件数	9月	44.5k	43.3	45.4

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6240 ~ 0.6500
AUD/JPY 92.70 ~ 97.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

10月は年初来安値を更新しながらレンジを拡大し上下に振幅した。月初は0.6438でスタート。豪州や中国が休場で薄商いの中、「インフレ抑制には政策金利を高水準で据え置く(もしくは追加利上げの)必要がある」とした複数米金融当局者の発言で11月の米利上げ観測が高まった。米国債利回りが大幅上昇し、加えて米指標で米雇用環境の底堅さが示されるとドル買いに拍車がかかり、豪ドルは年初来安値を0.6286まで更新。この他円安介入が観測され、ドル円が150.16円まで上昇後、147.43円までフリーフォールする動きに豪ドル円は94.40円近辺から一時93.066まで下落した。6日、米9月雇用統計は非農業部門雇用者数が予想、前回値を上回り、米追加利上げ論拠が強まった。直後は0.6361から0.6315近辺まで下落するも、流れが一巡すると株価の反発する動きに追従し0.64近辺まで上昇。9日は複数の米金融当局者が「米債利回り上昇が景気を一段と抑制する可能性」に言及し、追加利上げの必要性が低下するとの認識を示した事で米追加利上げ観測が後退し、株が続伸する動きにフォローする形で豪ドルは0.64台乗せ。FOMC議事要旨では、「リスクがより均衡のとれた状態になった」との見解を示し、これまでの利上げに重点を置く姿勢からの転換を示唆する内容となった。これを受けて株高、ドル安の反応となり、豪ドルは0.6410近辺まで上昇。12日、米9月CPIは予想比上振れ、米追加利上げ観測が強まる結果に米金利上昇でドルが買いとなると0.63台前半まで下落した。月後半も堅調な米経済指標が発表され、追加利上げ織り込みが高まる場面や、中東情勢をめぐる懸念からのリスクオフとなる場面ではドル買いが先行し、豪ドルの頭を押えた。19日、豪9月雇用統計で正規雇用者数が減少したことを受けて売りとなり一時0.63割れまで下落。25日、豪7～9月期CPIが予想を上回り、一時0.64ちょうどまで上昇したが、米9月新築一戸建て住宅販売数が予想以上に増加した事を受け、米高金利が長期化すると観測が強まり、米金利高、ドル高の流れとなった事が豪ドルの重しとなり、豪ドルは0.6310近辺まで下落した。26日、ブロックRBA総裁が議会証言にて前日発表された強いCPIは予想の範囲内と発言したことが材料視され、豪ドルは売りで反応。軟調な株価も重しとなり、再び年初来安値を更新し0.6270を付けた。月末にかけては0.63台を中心に推移した。

■ 今月の見通し

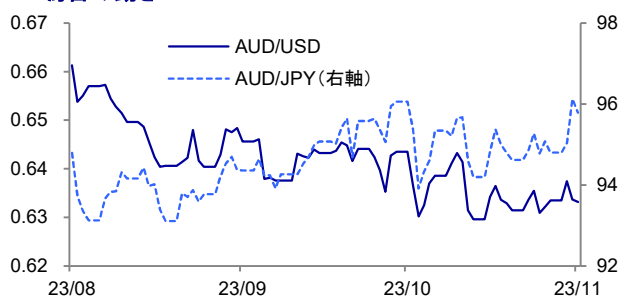
10月は堅調な米経済指標が相次いだ事や中東情勢を巡るリスクセンチメントの高まりからドル買いが先行する場面が多く見られ、豪ドルは頭を押えられた。また、豪州では底堅い豪9月CPIを背景に11月のRBA会合で利上げを行う根拠が強まったとみられていたものの、翌日の議会証言でブロックRBA総裁が「燃料価格が高騰している事は承知しており、ノーサプライズであった」とほぼ想定範囲内との認識を示したことで利上げ確率が下落すると豪ドルは年初来安値を0.6270まで更新した。

11月は月初1日(水)にFOMC会合の他、米財務省の四半期定例入札を控えており、中長期国債発行規模がどの程度となるかに焦点が集まっている。市場では発行額増額が見込まれているが、供給額に対して市場需要が相対的に弱ければ米長期金利が上昇し、それに伴いインフレ抑制の為の米追加利上げの必要性が減る可能性がある。但し、この場合米追加利上げの可能性が減っても米長期金利が高水準で推移する為、ドル買いの流れを予想する。故に月初、豪ドルは頭を押えられてスタートするとみる。

月中では豪7～9月賃金指数の発表が控えており、豪失業率が未だ4%を下回る水準である事に鑑みると、加速トレンドに注意が必要である。もっとも、7月の最低賃金の大幅な引き上げを受けて急上昇する可能性をはらんでいる。そうなればRBAが年末前に追加利上げに踏み切ることも予想される為、豪7～9月賃金指数の結果には注意を払いたい。その他、中東情勢を巡っては地政学リスクが高まる場面においてリスク回避的なドル需要は残っている事からも豪ドルは頭を押えられ易くならう。一先ずは11月1日(水)のFOMC会合と7日(火)のRBA会合で今後の両国の金融政策と経済見通しを確認し、米豪金利差の推移を見たい。

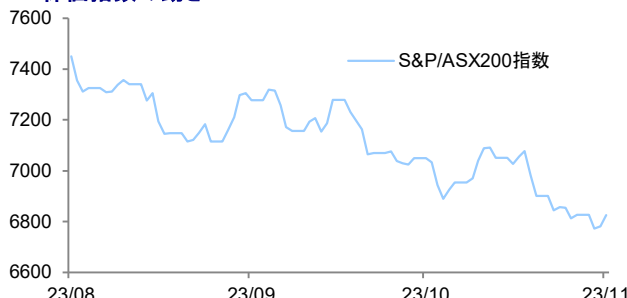
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
10/3	RBAキャッシュレート
10/5	貿易収支
10/17	RBA議事要旨
10/19	雇用者数変化
10/19	失業率
10/19	正規雇用者数変化
10/19	非正規雇用者数変化
10/25	CPI (前年比)
10/25	CPI YoY
10/30	小売売上高(前月比)

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
10/3	4.10%	4.10%	4.10%
8月	A\$8700m	A\$9640m	A\$7324m
10/3	-	-	-
9月	20.0k	6.7k	63.3k
9月	3.7%	3.6%	3.7%
9月	-	-39.9k	7.2k
9月	-	46.5k	56.0k
3Q	5.3%	5.4%	6.0%
9月	5.3%	5.6%	5.2%
9月	0.3%	0.9%	0.3%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3400 ~ 1.3950
CAD/JPY 106.00 ~ 110.00

米州資金部カナダ室 ミタリ・チャクラデオ
岩田 保子

■ 先月の為替相場

9月下旬にはほぼ1.34台で推移していたUSD/CADは、10月には経済指標の他、米国債利回りの上昇や原油価格などの傾向を受け、1.39台近くまで上昇した。

初旬は、カナダの9月S&Pグローバル製造業PMIが2020年以降の最低値(47.5)まで低下し、USD買い・CAD売り優勢となった。続いて米国で発表されたADP民間雇用者数は予想を大きく下回ったものの、前月分が上方修正され、その後発表された米国の製造業景況指数が予想を上回ったことからUSD買いがさらに進んだ。10/5には原油価格の下落によってUSD/CADは一時1.3786まで上昇した。10/6に発表された米・加両国の9月雇用統計は、いずれも予想を大幅に上回る雇用増という結果になった。しかし、最近の国債利回りの上昇を受けて当局者は「慎重に進める」とのFRB高官の発言が伝わり、USD売りへと流れが変わった。

中旬には、米国の9月CPIは前月比概ね低下したものの、予想とほぼ一致したこと、今後も金利は高い水準が続くこととFEDの利上げの可能性もまだ残っていることへの懸念が深まり、USD、米長期金利ともに大きく上昇した。しかし、イスラエル・ハマスの紛争により、原油価格が上昇したこと、CADが1.36台前半まで買い戻された。10/17に発表されたカナダの9月CPIは前月比低下し、金利引き上げによる需要減の影響がうかがわれた。その後は中東の地政学的リスクが意識される中、米国債利回りも激しい変動をみせ、USD/CADは1.36台後半から1.37台前半で推移した。しかし10/20にはカナダの8月小売売上高が発表され、前月比で伸びが鈍化し、市場でのカナダ利上げの確率が低下した。

10/25に行われたカナダ中銀会合では、予想通り政策金利が2会合連続で5.00%に据え置きとなった。その発表以後、CAD売りが進み、USD/CADは7カ月ぶりに1.38台前半まで上昇した。その後、米長期金利の上昇や原油価格の下落なども背景となり、月末に向けてUSD/CADは1.38台で推移した。

■ 今月の見通し

10/25のカナダ中銀の会合では政策金利は市場の予想通り5%に据え置かれた。決定の背景として、カナダ中銀は、これまでの利上げによって景気が減速し(特に消費、住宅や耐久財、サービスに対する需要が減少)、価格上昇圧力が低下しているという証拠が増え、経済の需要と供給がバランスに近づきつつあるとの認識を示した。

またカナダ中銀は、来年のインフレ率見通しを平均3%とし、前回7月時点の2.5%から上方修正した。インフレの上振れリスクとして、家計や企業のインフレ期待の高止まり、異常気象の増加、イスラエル・ハマスの戦争を含む地政学的な不確実性が高まっていることを挙げた。成長率の見通しは今年が1.2%、来年は0.9%にそれぞれ10月時点の予測(2023年1.8%、2024年1.2%)から下方修正した。

そして「物価安定に向けた進展が鈍く、インフレリスクが高まっていることを懸念している」とし、必要ならばさらに政策金利を引き上げる用意があるとの姿勢を維持した。

今後の相場見通しの焦点は、米国、カナダ両国の経済動向や地政学的リスクが米金利に与える影響になると予想。経済動向ではインフレ率のほか、特に米国の雇用統計や消費関連指標で堅調さが維持されていくかどうか、カナダでは消費を中心にすでに景気が減速し、第2四半期GDPは前期比年率0.2%に落ち込んだことから、11月末に発表される第3四半期GDPが注目される。

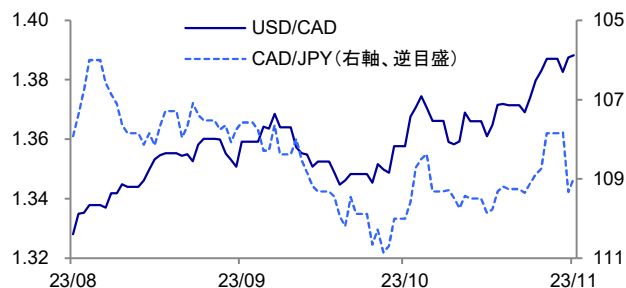
為替についてはUSD/CADの上値、下値ともに上昇にシフトしていることから、レンジとしては1.3400～1.3950と予測。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のペット事情』
日本でも最近、保護犬、保護猫の里親活動が盛んになり、Youtubeでも”野良猫から家猫へ”といったテーマの投稿がたくさん見られるようになりました。カナダはおそらく、保護犬・保護猫の里親活動においては世界でも有数の進んだ国ではないかと思います。もともと犬や猫などのペットを飼っている人は大勢いますが、例えば犬の散歩で出会う飼い主さんと話をしていると、”この子はアダプト(adopt)した犬なのよ”ということばを本当によく聞きます。カナダ支店のあるトロントでは、Toronto Humane Societyという動物の保護活動を行っている代表的なチャリティ団体があり、犬や猫、ウサギ、ハムスターといった動物を飼いたい人が頻繁に訪れているほか、ここでのボランティアも競争率が非常に高く人気です。このほかにも、自宅に保護犬や猫を受け入れて、飼い主さんが見つかるまで世話をするといいことも日常的に行われています。保護犬については、カナダ国内のみならず、メキシコや南米の国々、また韓国やエジプトといった遠くの国々からも呼び寄せ、保護していることで、そのネットワークの大きさとカナダ人の熱心さには尊敬の念を抱かずにはいられません。

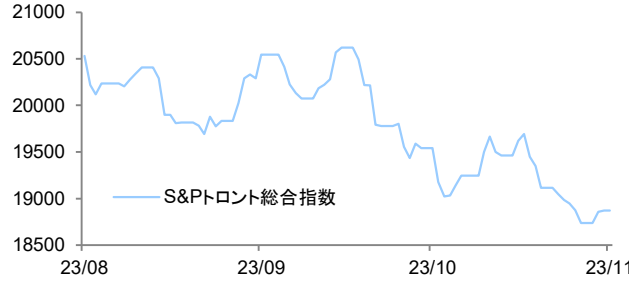
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/2	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	9月	-	47.5	48.0
10/6	雇用ネット変化率	9月	20.0K	63.8K	39.9K
10/6	失業率	9月	5.6%	5.5%	5.5%
10/16	製造業売上高(前月比)	9月	1.0%	0.7%	1.6%
10/17	CPI(前年比)	9月	4.0%	3.8%	4.0%
10/18	住宅着工件数	9月	240.0K	270.5K	250.4K
10/19	鉱工業製品価格(前月比)	9月	0.3%	0.4%	1.9%
10/20	小売売上高(前月比)	8月	-0.1%	-0.1%	0.3%
10/25	カナダ銀行翌日物貸出金利	10/25	5.00%	5.00%	5.00%
10/31	GDP(前月比)	8月	0.1%	0.0%	0.0%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1320	～	1370
KRW/JPY	10.87	～	11.36
JPY/KRW	8.80	～	9.20

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

10月のドル/ウォン相場は1300ウォン台半ばで揉みあう展開。月初4日のドル/ウォンは1,360.0ウォンでオープン。韓国大型連休中に米金利が上昇を続けたことを受けてドル買いが進行。年初来高値を更新し、1,363.5ウォンの高値をつけた。5日は米金利が低下したことでドル買いが調整される値動きに1,340ウォン台半ばまで下落するも、その後は1350ウォンを回復して推移した。

翌週10日も1,350ウォン前後での動きが続いた後、11日に米長期金利が4.5%台に低下すると月間安値の1,337.5ウォンまで下落した。その後米9月CPIを控え小動きとなるも、CPI発表後、米30年債入札が低調に終わり、米金利が一転上昇すると、再び1,350ウォンを回復する動きとなった。

中東情勢について、イスラエルが指示したガザ地区からの避難期限を経過した翌週16日はリスク回避的な動きが強まりウォンには下落圧力となった。株式市場においても外国人投資家による資金流出が続いた。19日にはBOK会合が開催され、市場予想通り政策金利3.5%の据え置きが決定された。声明文では、中東の地政学リスクへの不確実性が言及された他、物価動向については、インフレ上昇リスクが拡大し、目標達成の時期が後ずれになる可能性が言及された。委員会メンバー6人のうち5人は追加利上げの可能性を排除しておらず、総じてタカ派的な姿勢が維持されたものの、BOK会合の結果自体は市場予想の範囲内だったことで相場への影響は限定的だった。ただし、米金利はBOK会合前後で上昇が続き5%手前で推移。ドル/ウォンも再び1,359ウォン付近まで上昇した。

翌週24日には米金利が低下したことで1,340ウォン台前半まで再び下落するも、その後月末に絡んだ実需の買いや米長期金利が高止まりしたことで、26日には一時1,360.0ウォンまで上昇した。月末にかけてもドル/ウォンは底堅い推移が継続し、30日終了時点で先月末比+1.6ウォンの1,350.9ウォンでクローズした。

■ 今月の見通し

11月のドル/ウォンは1,300ウォン台半ばでの揉み合い継続を予想する。

10月のドル/ウォン相場は米金利上昇と中東情勢への懸念がサポートし、1,350ウォンを挟み上下する展開だったが、今月も外的要因に左右される展開が続こう。BOKは10月19日の会合にて政策金利の維持を決定。インフレと家計債務を抑制するために景気抑制的な金融政策が引き続き必要であるとの考えを示し、追加利上げの可能性を維持するなどタカ派色を残した格好。一方で、一人のメンバーは利下げの選択肢も持ち、政策に柔軟性を持たせるべきとした。しかし、利下げは対外諸国との金融政策のギャップを拡大し為替相場に影響を及ぼし、ウォン安を引き起こす可能性があるため、早期に実現する可能性は低かろう。

その他韓国の9月貿易収支は4か月連続で黒字となった。最大の輸出品目である半導体の輸出額は99.3億米ドルで前年同月比13.6%減少も需給環境の改善や高付加価値製品の需要拡大などにより、月間ベースでは今年最大となり着実に回復を見せている。しかしながら、貿易黒字の要因は特にエネルギー価格などの下落による輸入の減少によるもので、中国経済を含め外部環境は以前不透明な状況であり、ウォン買い圧力は限定的な状況が続くだろう。

短期的には11月初めのFOMCの結果と米金利動向がより注目される展開となり、米金利の底堅い推移が継続するという前提に立てば、ドル/ウォンの下値は限定的で今月も1,350ウォン前後を中心とした動きになるだろう。

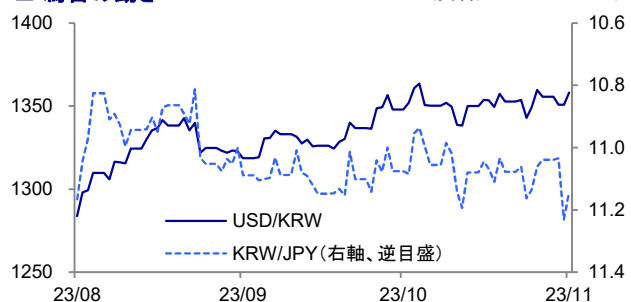
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のペット事情』

韓国でペットを飼育する世帯は2022年末で552万世帯と2020年末から2.8%増加。約4分の1の世帯にペットがいる計算になり、犬を飼う世帯が最多で71.4%、次が猫の27.1%、その他金魚、亀といったペットが飼われているそうです。人気の犬種はマルチーズ、プードル、ポメラニアンなど、猫はコリアンショートヘアが圧倒的一位とのこと。コロナ以降、在宅勤務の拡大とソーシャルディスタンスの確保により寂しさを減らす為にペットを飼い始めた人が多く、ペット市場は拡大を続けます。ペッコノミー(Pet+Economy)なる造語も生まれペット産業は注目の分野となっています。

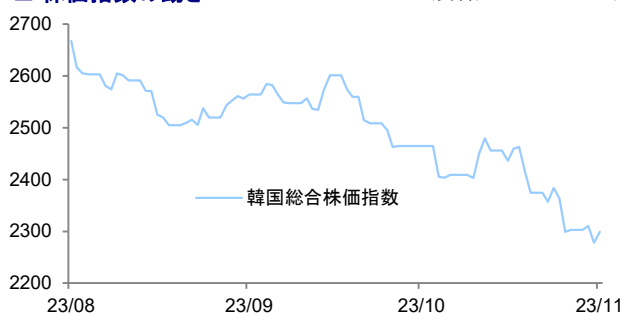
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
10/1	貿易収支
10/1	輸出(前年比)
10/1	輸入(前年比)
10/5	CPI(前月比)
10/13	失業率
10/19	BOK政策金利
10/24	PPI(前年比)
10/25	消費者信頼感
10/26	GDP(前期比)

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
9月	1078M	3700M	870M
9月	-9.3%	-4.4%	-8.4%
9月	-18.2%	-16.5%	-22.8%
9月	0.4%	0.6%	1.0%
9月	2.6%	2.6%	2.4%
-	3.5%	3.5%	3.5%
9月	-	1.3%	1.0%
9月	-	98.1	99.7
3Q	0.5%	0.6%	0.6%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 32.35 ~ 32.75
TWD/JPY 4.55 ~ 4.70

東アジア資金部台北室 久本 和樹

■ 先月の為替相場

10月のドル/台湾ドルは上昇し、年初来高値を更新。

月初の10月2日は32.235でオープン。9月末に米政府機関の閉鎖が回避されたことでリスクセンチメントが改善すると、台湾株への資金流入が増加し、台湾ドル買いが優勢な展開に。その後、7日にパレスチナのガザ地区からイスラエルに向けて大規模なロケット攻撃がなされたとの報道を受け、週初よりリスク回避の動きから米金利が低下していたことからドル安が進み、一時32.068まで下落した。

月央になると、12日発表された米9月CPIの結果が市場予想対比堅調な結果となったことを受けて米金利の上昇が加速し、ドル全面高の動きとなった。米金利の上昇を嫌気して米ハイテク株も下落していることも背景に台湾株からの資金流出が大きく、台湾ドル売りに拍車をかける展開となり、32.3台後半まで上昇した。しかし、2022年10月につけた高値の32.40という水準が意識され、上値を抑える動きも見られたことから32.4を目前に揉み合う展開となった。

月後半に入ると、米9月小売売上高が堅調な結果となった他、FRBのパウエル議長から政策金利を高く維持するスタンスがタカ派と捉えられたことから米金利上昇が加速し、23日には2007年7月以来のハイとなる5.021%まで上昇。米長期金利が高止まりする中、台湾株、台湾ドル売りが加速し、ドル/台湾ドルは26日に32.482まで上昇し、2016年6月以来の高値を更新した。その後、米9月PCEが市場予想を下回る結果となったことを受け米金利が短期中心に低下する中、輸出企業による月末のドル売りも後押しとなり月末は上値重く推移し32.40台前半で揉み合いとなった。

■ 今月の見通し

11月のドル/台湾ドルは上値を試す展開を見込む。

10月は米9月CPIや、米9月小売売上高などの経済指標が堅調な結果となったことを受けて米長期金利が上昇したことで、グローバルに米ドル全面高が進む流れとなり、ドル/台湾ドルも節目である32.4を上抜け高値を更新した。金利の急上昇を受け、米ハイテク株が顕著に下落する展開となっていたが、そのあおりを受け台湾株も大きく下落。台湾の株価指標である台湾加権指数はその4割程度をIT、半導体関連株が占めており、金利上昇の影響を受けやすい構造となっている。海外投資家による台湾株売却が進み、台湾から海外への資金流出、台湾ドル安を後押しする形となった。

11月については32.40の節目を上抜けた後、上値余地を探る展開となるであろう。米国経済指標は総じて堅調な結果となっており、高金利政策の長期間維持が警戒される。係る環境下、米金利が低下に転じるためには米経済に腰折れの兆しを確認される必要があり、足元はドル安トレンドへの転換は期待しづらい。また、台湾の輸出、貿易収支が相応に改善してきていることは台湾ドル高に寄与するものの、先行性のある指標である輸出受注に関しては引き続き低水準での推移となっており、貿易黒字の拡大にはもう少し時間がかかる公算となっている。そのため目先は台湾ドル買い圧力の高まりも期待しづらく、足元のトレンドであるドル高台湾ドル安が継続しやすいくであろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のペット事情』

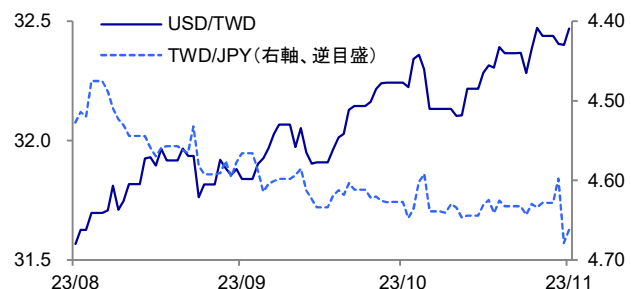
台湾ではとにかく動物を大切にします。犬が大好きな人が多い印象。街中でもペットを連れて歩いている人を良く見かけます。日本とは異なり犬は放し飼い、首輪のついていないことも多々あり、驚くことしばしば。その他にも野良犬、野良猫もかなり多く見かけます。台湾では餌やりも禁止されておらず、むしろ餌やりをしてあげるのが文化にすらなっているように感じられます。このように大変動物との距離が近い台湾ですが、驚くべきことに町の小さな食堂なんかでは店内に普通に店主の飼っている犬、猫が寝ていたりします。

また、昨今の台湾では子供を育てる代わりにペットを飼う若者が増えており、プチブームのように感じているようです。やはり犬が最も多く飼われており、次に魚、猫が人気になっています。鳥(オウムや九官鳥)や爬虫類を飼っている人も中にはいるようです。

台湾の犬で最も代表的なのは台湾犬と呼ばれる全身真っ黒で細い(ドーベルマンみたいな体系です)犬種です。南アジアの狩猟犬の子孫のようですが、絶滅の危機に瀕しているともいわれています。ご興味のある方は是非台湾に見に来ることをお勧めします。

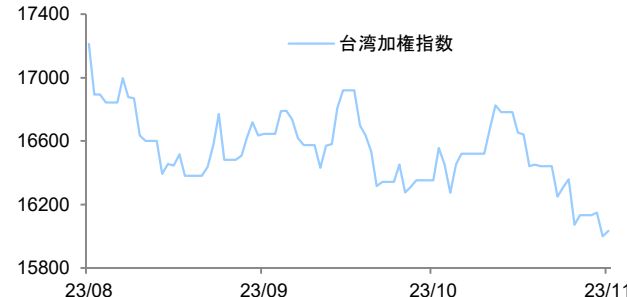
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/5	外貨準備高	9月	-	564.01B	565.47B
10/5	CPI (前年比)	9月	2.40%	2.93%	2.52%
10/11	輸出 (前年比)	9月	-3.0%	3.4%	-7.3%
10/11	輸入 (前年比)	9月	-14.2%	-12.2%	-22.9%
10/11	貿易収支	9月	7.50B	10.32B	8.59B
10/20	輸出受注 (前年比)	9月	-13.90%	-15.60%	-15.70%
10/23	失業率	9月	-	3.440%	3.420%
10/23	鉱工業生産 (前年比)	9月	-	-6.72%	-10.81%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8000 ~ 7.8400
HKD/JPY 18.80 ~ 19.50

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【10月の香港ドル直物相場】

10月の香港ドル直物相場は、7.81台半ばから7.83台半ばのレンジ内で推移した。四半期末を超え、香港ドルの短期金利が低下したことで米ドルと香港ドルの短期金利差が再び拡大し、香港ドルは弱含む展開となった。IPO活動に伴う香港ドル需要は徐々に上向きつつあるが、香港ドル直物相場を下支えする程の力強さはない。中国本土の投資家による香港株買い圧力も強く、ストックコネクト(中国本土市場との株式相互取引制度)を通じた香港株式市場への年初来資金流入額は2,800億香港ドルに達した。しかし一方で外国人投資家による資金流出が続いており、ハンセン株式指数は下落を続けている。政策面では、年次の施政方針演説において、域外居住者および2軒目の住宅を購入する域内居住者の双方を対象とした不動産購入税の引き下げ、株式取引の印紙税引き下げ(0.13%から0.1%)、新生児一人当たり2万香港ドルの現金支給等、いくつかの支援策案が明らかとなったものの、為替市場の反応は鈍い。不動産市場も低迷しており、香港不動産価格の先行指標となる中原城市領先指数(CCL指数)は2017年以来の低水準に沈んでいる。

【10月の香港ドル金利市場】

四半期末を超えたことや、香港政府発行のグリーンボンド購入資金の払い戻しを通して市中流動性状況が緩和された結果、O/Nの香港ドルHIBORは高値の5.81%から3.43%まで大きく低下した。1か月物の香港ドルHIBORは5%を下回った一方で、年末越え期間となる3か月物の香港ドルHIBORは5.2%を上回る水準で推移している。HKMAのアグリゲートバランスが450億香港ドル近辺と低水準で推移する中、香港ドル短期金利のボラティリティは引き続き高止まりしており、香港の銀行は資金需要に応じてHKMAの割引窓口貸出制度(ディスカウント・ウインドウ)を利用している。中長期金利に目を向けると、根強いインフレ圧力に対抗する為、米連邦準備理事会(FRB)が高い政策金利を長期的に維持する可能性が高いとの見方を受けて米長期金利が上昇する中、香港ドルのスワップ金利も長期ゾーンを中心に上昇圧力が加わった。それでも3か月物HIBORが高止まりしていることから、香港ドルの長短金利差(3か月物HIBOR - 3年物スワップ金利)は50bps近辺でほぼ横ばいとなっている。

■ 今月の見通し

【11月の香港ドル直物相場】

FRBメンバーが利上げサイクルの終了を示唆し始めたことで、香港ドル直物相場はベッグ制の中心である7.80に向けて底堅く推移する展開を予想している。年末までに米ドルと香港ドルの短期金利差が縮小すれば、キャリートレードの妙味が薄くなることで香港ドル直物相場をサポートすると考えられる。しかし、香港経済への弱気な見方は根強く、中国の不動産セクター懸念の波及も相まって、外国人投資家は香港への投資を手控えている。ハンセン株式指数の軟調な値動きと取引高の縮小は、外国人投資家の消極的な姿勢を表していると言えるだろう。株式取引の印紙税が0.13%から0.10%に引き下げられたが、悲観的な経済見通しや国際金融センターとしての地位低下は覆いそうにない。長期的に見れば、不動産セクターの低迷による構造的な財政赤字が、米ドルベッグ制の安定性と信頼性を損なう可能性もある。

【11月の香港ドル金利市場】

11月の香港ドル短期金利は、年末に向けた季節性資金需要を意識して上昇に転じると予想される。また、規模は小さいながらもIPO活動が徐々に活発化し始めており、こちらも資金需要の増加を通じて香港ドル短期金利を下支えするだろう。FRBは11月のFOMC政策決定会合で利上げを見送ると予想されており、香港の銀行はプライムレートの水準を据え置くとみられる。しかし、米国債利回りの上昇や、FRBが高い政策金利を長期間維持する可能性が高いという見方は、米ドルベッグ制を通じて香港ドル金利の上昇圧力となる。

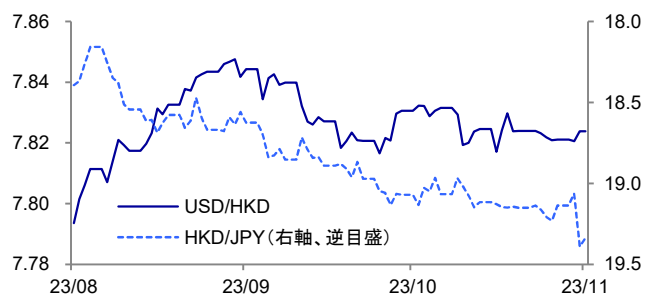
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『香港のペット事情』

新型コロナウイルスの流行期間、香港ではペットを飼い始める人が急増しました。社会的な集まりが制限され、ほとんどの人にとって自宅で過ごす時間が増えたからでしょう。香港は出生率が低く、子供を持たない人も多い為、そうした人々がペットに捧げる時間や経済的余裕があることに改めて気づいたのかもしれませんが、ちなみに犬と猫で人気に大きな差はありませんが、居住スペースが限られている香港では、猫を飼う人々の方が若干多い気がします。住居の問題に加えて、忙しいライフスタイルを送る人が多い香港では、毎日犬の散歩に時間を割くことが難しい、という事情もあるのかもしれませんが。その為、運動量が少なくても済み、室内環境にも比較的対応できる猫が好まれているとも考えられます。しかしながら、ペットを飼う人々は、香港におけるペットの医療費の高さという問題に直面します。こうした経済的負担を考え、ペットを飼うことを断念している人々も一定数いるでしょう。

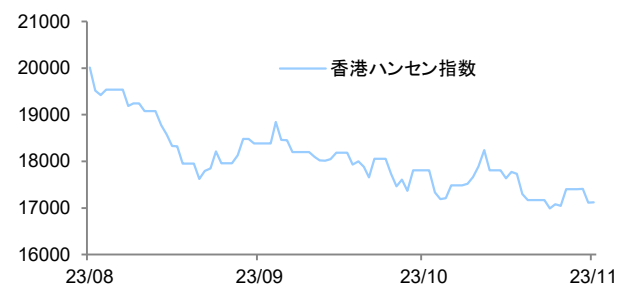
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/29	小売売上高(価額,前年比)	8月	15.8%	13.7%	16.7%
9/29	小売売上高(数量,前年比)	8月	-	-39.1b	-41.8b
10/5	S&P Global Hong Kong PMI	9月	-	49.6	49.8
10/6	外貨準備高	9月	-	\$415.7b	\$418.4b
10/19	失業率(季調済)	9月	2.8%	2.8%	2.8%
10/20	CPIコンポジット(前年比)	9月	1.8%	2.0%	1.8%
10/26	輸出(前年比)	9月	-5.2%	-5.3%	-3.7%
10/26	輸入(前年比)	9月	-7.2%	-0.4%	-0.3%
10/26	貿易収支(HKD)	9月	-32.5b	-64.6b	-25.6b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	7.2000	～	7.3500
	CNY/JPY	20.13	～	20.55
	100JPY/CNY	4.8600	～	4.9700

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 竹本 寛

■ 先月の為替相場

9月のドル人民元(オンショアUSDCNY)は狭いレンジで底堅く推移。

国慶節明けの9日、7.29台でオープン。新規材料に欠ける中、7.30を挟んだ狭いレンジでの推移した後、12日に公表された米9月CPIはFEDの示す政策金利を高めて維持するというシナリオをサポートする内容となったことでドル高の動きに連れてドル人民元も小幅に上昇。しかしながら、PBOC基準値が大きく元高方向に設定される状況が継続する中で、USDCNYは7.32付近を上限に上値が抑えられていることから、さらなる上値追いの動きはなく、狭いレンジの中でじりじりと上昇する展開。

中旬以降もPBOC基準値が7.1790台と実勢相場対比元高水準での設定が続く中、USDCNYも7.32台の上限が意識される展開。18日、GDP・主要統計の結果を受けて、発表直後は一時7.29台まで元高が進行するも、その後、同日中に7.31台後半まで値を戻す展開。

24日、全人代常務委員会にて1兆元規模の国債追加発行や、財政赤字を対GDP比で3.0%から3.8%へ引き上げる計画等が承認された。ただし、為替市場への影響は限定的となった。その後は米金利の根強い上昇圧力を背景に、7.31台後半までじり高で推移。しかしながら、7.17台後半でのPBOC基準値設定が継続する中、7.32付近を上限に上値を抑えられる状況となって7.31台で月末を迎えている。

■ 今月の見通し

USDCNYの上値余地は限定的ながら下値も固く推移する展開を予想。

国慶節前から続くPBOC基準値の元高方向の設定により、USDCNYの値幅上限は7.32台の水準に設定される状況が継続している。米中金融政策格差を背景にUSDCNYに対しては下値がサポートされる展開が継続している。オンショア市場における取引高は平時の3分の1程度まで減少、物理的に上値が抑えられる格好となっており、高値圏での膠着状態が続いている。

PBOC基準値が固定化される状況下、この7.32付近の水準感は当局が考えるひとつの防衛目線とも見られ、基準値設定が動かない限りはこれ以上上値を試す展開は想定しづらい。しかしながら、不動産セクターの苦戦が中国経済の先行き見通しの足を引っ張る状況となっており、証券投資フロー等からも確認できるように外国人投資家の人民元建て資産からの逃避の動きは継続している状況。

引き続き、USDCNYに対してはアップサイドの圧力がかかりやすい状況であることから、今月においても値幅上限に張り付く形での膠着推移をメインシナリオとしたい。他方、中期的には米利上げのピークアウトと利下げに関する議論の開始、また鈍重ながらも中国経済の回復を想定し、ゆるやかな軟調推移を予想したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のペット事情』

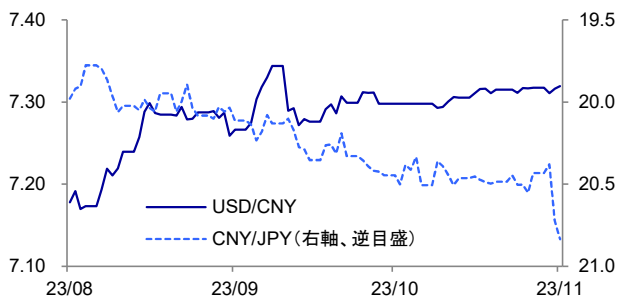
上海等の都市部ではマンションに住む人も多いので、やはり家の中で飼える小型犬や猫が人気のようです。ただし、最近は人々の嗜好も多様化してきているのか、ショッピングモール等を歩いていると、うさぎや豚などのペットショップも見かけることがあります。

中国において豚は富や子孫繁栄など、縁起物として親しまれており、中国で生活していると様々な場面で豚の絵や置物を目にすることがあります。金融の世界においては「ブル・ベア」というように、ディーリングルーム等に雄牛の置物があることがよくありますが、当地においては金の豚が鎮座しています。そのくらい中国には豚が生活に密接に結びついているので、ペットとしての需要も相応に高まっているのではないかと推察されます。

ただ、中国では少し都市中心部を離れると、野良犬が闊歩しているのをよく見かけます。今後、“野良豚”が増えないことを祈っておきます。。

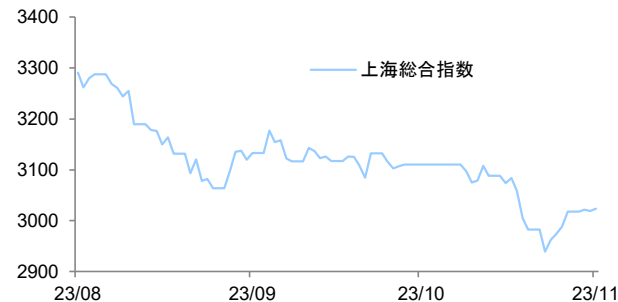
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/1	財新製造業PMI	9月	51.2	50.6	51.0
10/1	財新非製造業PMI	9月	52.0	50.2	51.8
10/13	貿易収支	9月	\$70.60b	\$77.71b	\$68.26b
10/13	CPI(前年比)	9月	0.2%	0.0%	0.1%
10/13	PPI(前年比)	9月	-2.4%	-2.5%	-3.0%
10/18	GDP(前年同期比)	3Q	4.5%	4.9%	6.3%
10/18	鉱工業生産(前年比)	9月	4.4%	4.5%	4.5%
10/18	小売売上高(前年比)	9月	4.9%	5.5%	4.6%
10/18	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	9月	3.2%	3.1%	3.2%
10/20	LPR1年物	-	3.45%	3.45%	3.45%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3400 ~ 1.4000
SGD/JPY 106.50 ~ 112.50

アジア・オセアニア資金部 森谷 友一

■ 先月の為替相場

先月のUSD/SGD相場は横ばい推移となった。

月初2日に1.36台後半で取引を開始。米9月ISM製造業景気指数が市場予想を上回りドル買いが強まると1.37台まで上昇。3日も米金利が上昇する中、底堅い推移が続いたが、4日は米9月ADP民間雇用者数が市場予想を下回り米9月ISM非製造業景気指数も前月から低下するとドル売りが進み1.37を割れる局面も見られた。5日も上値の重い推移となった後、6日は注目の米9月雇用統計において非農業部門雇用者数が市場予想を上回ると一旦ドル買いで反応し1.37台前半まで上昇もすぐに1.36台半ばまで反落した。

9日、アジア時間は中東情勢への懸念からリスクオフとなりドル買いが強まるも海外時間はFRB高官によるハト派発言を受けドル売りが進行。10日から11日にかけても米金利が低下基調で推移する中上値の重い推移となり1.36台前半まで下落も、12日は米9月CPIが市場予想を上回ると反発し1.37台を回復する局面が見られた。13日はMAS会合が開催され金融政策の現状維持が発表されたが市予想通りであったため市場の反応は限定的となった。

16日から17日にかけては1.37ちょうどを挟んでの方向感に乏しい推移となったが、18日は中東情勢への懸念が高まりリスクオフの展開となる中、ドル買い優勢の展開となり19日も米金利が上昇しドルは底堅い推移となった。

23日は海外時間に米10年債利回りが節目となる5.0%を上回るもその後低下するとドルも反落。24日も前日の流れを引継ぎ1.36台前半まで水準を下げた。25日、良好な米経済指標の結果等を背景に1.37台を回復すると翌26日も続伸。しかし、ドル買いが一服すると1.36台後半まで反落した。

30日、全般的にドル売りが進み1.36台半ばまで下落した。

■ 今月の見通し

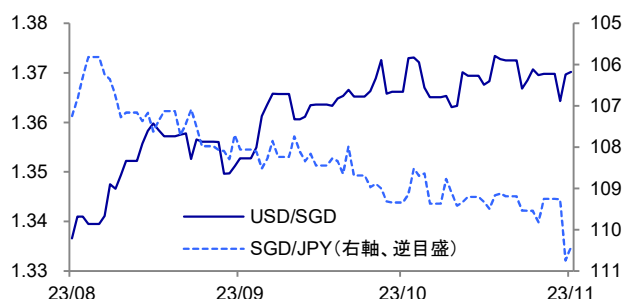
今月のUSD/SGD相場は底堅い推移を予想。

先月開催されたMAS会合においては現状の金融政策の維持が決定された。MASは同国の経済先行きについて「世界経済の先行きは依然不透明であり、国内の回復は予想より弱まる可能性がある。」とした一方で、「S\$ NEER政策バンドの持続的な上昇は、輸入インフレを抑制し、国内コスト圧力を抑制し、中期的な物価安定を確保するために必要」であるとし、今次会合では政策変更に踏み切ることはなかった。同日に発表された第3四半期GDP速報値は前年同月対比で+0.7%となり市場予想や前回値は上回っているものの今後の見通しについてMASは「エレクトロニクス・サイクルが緩やかに上向くにつれて2024年後半には徐々に回復すると思われるが、回復の時期と程度は大きな不確実性を伴う」としており慎重な見方を崩していない。インフレについてもピークアウトの兆しが見られており、更なる金融引き締め動く必要性は足元では低下しているように考えられる。

米国については今後の利上げの有無については今後確認されるデータ次第ではあるものの、9月公表のドットチャートでは年内残り一回の追加利上げが示唆されていることやパウエル議長は10月半ばに「アメリカ経済が力強い成長を続ける等新たな証拠が出てくれば、金融政策の一段の引き締めが正当化される可能性がある」とコメントをしていることを勘案するとここからよほど経済が崩れない限りは米金利は低下しづらい展開が続くそう。引き続きFRB高官や経済指標の結果を見極める必要があるものの、依然として追加利上げの可能性が意識される中では、ドル売り圧力は高まりにくい状況と考えている。

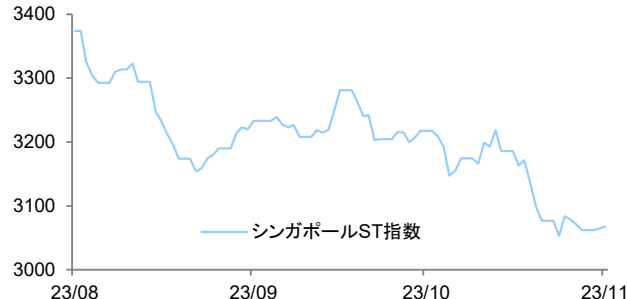
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/5	小売売上高(前年比)	8月	0.9%	4.0%	1.3%
10/13	MAS会合				
10/13	GDP(前年比)	3Q	0.4%	0.7%	0.5%
10/17	非石油輸出(前年比)	9月	-15.0%	-13.2%	-22.5%
10/23	CPI(前年比)	9月	4.0%	4.1%	4.0%
10/26	鉱工業生産(前年比)	9月	-4.5%	-2.1%	-11.6%

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のペット事情』

今回のお題が”当地のペット事情”ということで、まずはペットの話になると必ず出てくる犬派・猫派論争。シンガポールの2023年の登録数を見てみますと、犬の11.4万(2019年比で+3%)に対して猫が9.4万(+10%)と数では犬がまだ優勢ながら勢いは猫。日本でも最近は猫派が増えているというような話を聞きますが、シンガポールでも同じような感じということでしょうか。私は犬を飼っているのですが、ここからは犬をテーマに日本との違いを書きたいと思います。

まず、犬を日本から連れてきた際にも強く感じたのが、管理の厳しさ。渡航前にはワクチンが有効か確認するための血液検査、寄生虫の駆除、個体管理のためのマイクロチップ挿入を求められましたが、こちらに来てからもドッグライセンスの取得・定期更新が求められます。驚いたのはドッグライセンスの費用が去勢の有無によって大きく違うこと。例えば1年のライセンスも去勢済であればSGD15ドルの費用が、去勢なしだとSGD90ドルと6倍に跳ね上がります。見たことのないのですが、野良犬が知らぬところでどんどん繁殖が進んでしまう、といったこともなさそうです。

他には、公共交通機関にはペットを連れて乗ることができません。日本の場合はカバンに入れて手荷物料金を払えば乗せられたのですが、こちらではペット可のタクシー一択です。

一方、予想通りだったのが病院代。日本より数倍高い印象です。10分で終わる血液検査をしてもらったお会計が500ドルを超えた時は絶望しました。自分だけでなくペットの健康にもしっかり気を配りたいと思います。

(アジア・オセアニア資金部 吉田朋哉)

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 34.90 ~ 36.60
THB/JPY 4.05 ~ 4.20

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 末廣 純太

■ 先月の為替相場

10月のドルパーツは月初に年間高値を更新した後、下落に転じた。36パーツ台後半で取引を開始したドルパーツは、前月末に米国でつなぎ予算が可決され、米政府機関の閉鎖が回避されたこともあってかリスクオン地合い強まる中、底堅く推移。3日に37パーツを突破すると、タイ中銀からは行き過ぎた相場変動に対しては介入も用意との声明が発せられるも、勢いは止まらず。米金利の動きに連れる格好で上昇を続け、4日には37パーツ台前半と年初来高値を更新した。ただ、その後は米金利の上昇がようやくの一服を見せる中で、ドルパーツも徐々に落ち着きを取り戻し、5日の市場予想を下回るタイ9月CPIや、強弱まちまちとなった6日の米9月雇用統計等を横目に37パーツちょうどを挟んだ推移となった。7日、イスラム組織ハマスによるイスラエル側への攻撃を受けて中東地域での地政学リスクが台頭。ドルパーツは初動こそ原油価格の上昇に連れる展開となったものの、リスクオフの強まりに伴い欧米金利が低下する動きを見せると、下落に転じた。また、Fed高官から相次いでハト派的な発言が見られたことや、10日に中国政府が財政赤字拡大を容認して新たな景気刺激策の準備を進めているとの報道が確認されたことも相俟って、ドルパーツは下落幅を拡大。前月からの大幅なパーツ安進行の反動もあってか、下落幅は相応に大きなものとなり、12日には一時36パーツ台前半を付けた。下落が一服すると、新規材料乏しい中でしばらく狭いレンジでの推移が続いたが、17日の米9月小売売上高や、18日に発表された中国主要経済指標の堅調な結果等にサポートされる格好でじりじりと上昇、一時36パーツ台半ばまで戻した。ただ、その後反転上昇を続けていた米長期金利が23日に5%台に乗せるも、定着には至らず跳ね返される動きにドルパーツも下落に転じ、再び36パーツ台前半まで下落。その後、一時反発する場面が見られるも、基調は変わらず上値の重い推移が続き、本欄を執筆している30日バンコク時間クローズ時点では、36パーツを割り込む動きを見せている。

■ 今月の見通し

11月のドルパーツは上値の余地が限られた値動きとなることを予想する。9月28日に開催されたタイ中銀(BOT)による金融政策決定会合(MPC)では今年の経済成長率と物価見通しを引き下げながらも0.25%の利上げに踏み切った。ただ、新政府の経済刺激策に伴うインフレ再燃やエルニーニョ現象に伴う食料品価格高騰等を警戒した予防的な利上げという側面が強く、次回(11月29日)、今年最後のMPCでは金利の据え置きを予想する向きが多いように見受けられる。かかる状況下、ドルパーツ相場に大きく影響を与えるのは米金利の動向であるが、足もと発表されている米経済指標に鑑みれば、「インフレ率が2%に向けて持続的に下がると確信が持てるまで、当面の間、金融政策は引締めめであるべき」とする米金融政策の方針が大きく変わることは想定し難い。先月のドルパーツ相場を見て月初の米金利上昇に伴い、ドルパーツは昨年11月以来となる37パーツ台を示現した。

ただ、直近の動向を見ると、状況は変わりつつあるように見える。先月初旬に37パーツを突破した後、一旦36パーツ台に戻したドルパーツは中旬から下旬にかけて米長期金利が堅調な推移を見せ、一時5%台に乗せた場面でも36パーツ台半ばまでの上昇に留まった。その要因として中国の景気支援に向けた動きも挙げられようが、タイ国内の要因も大きいと見ている。10月24日にタイ商務省が発表した通関ベースでの輸出額は農産品の大幅増加が寄与する格好で前年同月比+2.1%となり、2カ月連続で前年比プラスを記録。輸入額の減少もあり、貿易収支は今年3月以来の水準となる約21億ドルの黒字となった。また、新政権の目玉政策であった16歳以上の国民へのデジタル通貨給付についても富裕層の除外等、支出削減に向けた検討が進められるようだ。9月の新政権発足後、パーツ安をもたらした財政悪化懸念が和らぎ、引き続き貿易動向を中心に経済の回復の兆しを確認できるようであれば、パーツは確りとした推移となると想定している。

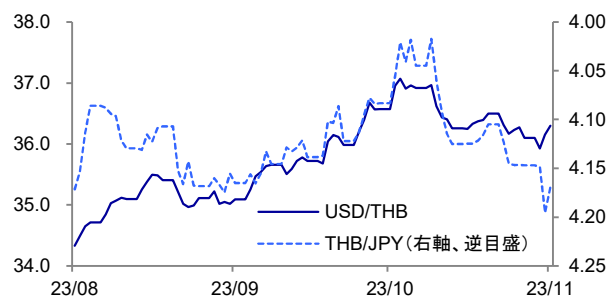
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のペット事情』
当地にいと「近年、タイのペット市場が急速に拡大している」という旨のニュースをよく目にする。所得の向上や、急速に進む少子高齢化に伴い子ども代わりにペットを飼う人が増えていることなど、様々な要因からペット人気が高まっているようだ。確かに、朝の通勤途中に犬の散歩をしている人をよく見かけるし、BTS(高架鉄道)の駅構内ではペットフードや飼育用品の広告が増えている印象を受ける。また、当地スタッフの話によれば、「猫カフェやドッグカフェといった店も最近増えているよ」とのこと。調べてみると、確かにバンコク内だけでも結構な数の猫カフェ・ドッグカフェがあるようだ。ここ数年で店舗数が急速に拡大したとのことで、そういってところからも当地のペット人気を感じることができる。

話は若干逸れるが、タイの娯楽の一つであるのがゴルフ。タイのゴルフ場では(もちろんコースによるが)犬がいてるのをよく目にする。犬たちがコースを所狭しとを楽しく走り回り、池周辺ではタイではおなじみミズオオカゲがのしのしと歩いている。そんな中でティーショットを打つのは中々エキサイティングな体験である。皆様もタイを旅行される際には当地の様々な動物とのふれあいをぜひ楽しんでいただきたい。

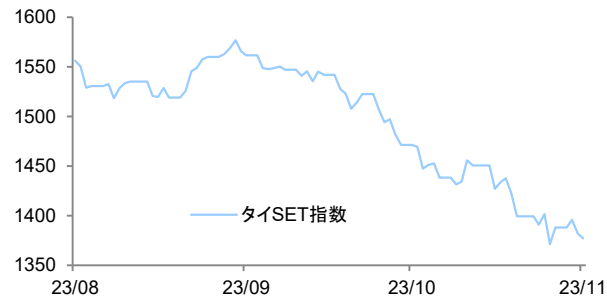
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/5	CPI YoY	9月	0.60%	0.30%	0.88%
10/5	CPI コア YoY	9月	0.70%	0.63%	0.79%
10/9	消費者信頼感指数	9月	-	53.2	51.6
10/24	自動車販売台数	9月	-	62,086	60,234
10/24	輸出(通関ベース)YoY	9月	-1.75%	2.10%	2.57%
10/24	輸入(通関ベース)YoY	9月	-5.55%	-8.30%	-12.76%
10/24	貿易収支(通関ベース)	9月	\$400M	\$2,090M	\$360M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.73	～	4.83
	MYR/JPY	31.25	～	31.75
	JPY/MYR	3.15	～	3.20

マレーシアみずほ銀行 内田 星

■ 先月の為替相場

先月のリング相場は、米金利のピークアウトによるリング買戻しのタイミングを探る状況はだったものの、中東情勢悪化や米経済指標を材料にドルが上昇すると、リング買い材料不在の中でUSD/MYRは上値を目指す展開。結局、下旬ににかけては98年アジア通貨危機以来のリング安となる4.795を記録する軟調な展開となった。

月前半のリング相場は方向感に欠ける展開。6日NY時間に発表された米雇用統計が予想以上に堅調だった他、中東情勢悪化によるリスク回避の流れでリング安を誘った一方、FRB当局者によるハト派発言でドル金利が低下する中、ドル上昇も続かなかった。12日に発表された米CPIでは市場予想を上回るインフレ高止まりが確認されたことから発表後はドル高が進行。ただし、馬中銀による自国通貨買い介入と見られるフローも入ったことから、月の前半のUSD/MYRは4.74目前に上値を追う展開とはならなかった。

月後半にかけてはリングは軟調に推移。USD/MYRは一時1998年アジア通貨危機以来の4.795を記録した。18日に発表された中国のGDPや鉱工業生産など各種経指標が総じて市場予想を上回ったことで人民元買いが入った。一方、リングは発表直後こそ人民元買いに連れ高となったもののここ最近の軟調地合いでリング買いは長続きしなかった。逆にNY連銀総裁による追加利上げに対する肯定的な発言が材料視された。中東情勢懸念でドル金利高となる中、23日午後にかけて急騰しUSD/MYRは25年ぶりの4.795を突破。26日には米新築住宅販売が市場予想を上回ったことでドルが上昇し、再び4.79を突破。その後は25年ぶりの高値達成感もありリング買戻しが入った他、馬中銀による介入警戒感や翌週に控える政策会合を前に薄商いとなる中、月末の実需買いでリング高水準に若干戻して引けとなった。

■ 今月の見通し

今月のリング相場も前月記載した見通しと同様にドルピークアウトが市場で概ね織り込まれる中、リング買戻しのタイミングを探る月となる。

先ず今月2日には米FOMCと馬中銀政策会合が控える。世界の市場参加者はFOMC後のパウエル議長の発言に注目。FF金利誘導目標の据え置きはほぼコンセンサスとなっている一方、前回同様にタカ派姿勢を堅持するかが注目ポイント。また同日の馬中銀会合では、市場コンセンサスが据え置きの中、今回も同時に発表されるステートメントの内容に注目したい。前9月会合では、中銀による金融政策の認識に変更が見られ、中銀目線がインフレ抑制から国内景気下支えにシフトしていることが確認されている。掛かる状況下で市場にサプライズが走ったのが先月19日に開催されたインドネシア中銀の政策会合だ。同中銀はルピア安に対する懸念を表明し、想定外の利上げに踏み切った。また、その翌週26日にフィリピン中銀も0.25%利上げ発表と共に次回11月会合での追加的利上げ措置の可能性を示唆。フィリピン中銀の利上げが国内インフレ上昇による措置だったことから、インドネシア中銀の利上げとはやや意味合いが異なるが、アセアン5で立て続けにサプライズ利上げが実施された点は馬中銀判断にも少なからず影響を与えると見られる。尚、マレーシアの財務副大臣は23日連邦議会答弁の中で、国内インフレが2%を割る水準まで下落するインフレ落ち着きが確認される中で、政策金利の引き上げを行う必要性がない点を強調。また、馬中銀のアブドゥルラシード総裁もKL市内で行われた気候変動と金融に関する国際会議の基調講演の場で、現在のリング安水準は経済の基礎的条件を反映していないと言及。リング安防衛の為の政策金利引き上げには触れず、通貨介入による過度のリング安阻止を行う意向を発表し、姿勢の一貫性を強調した。こうした点からも現時点で馬中銀がインドネシア中銀やフィリピン中銀によるサプライズ利上げに追随する可能性は低いとみている。ただし、この所の中銀による積極的なドル売り介入によりマレーシアの外貨準備高は着実に減少している。通貨介入によるリング安防衛は有限的措置であり、高値圏でしぶといドルとリング安を阻止したいマレーシア当局による我慢比べが続くそう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のペット事情』

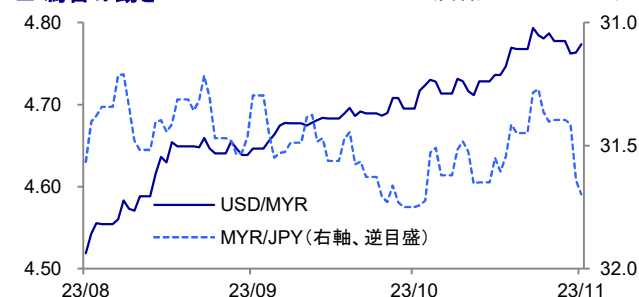
マレーシアでは、イスラム教で犬が不浄とされる理由もありペットと言えば、猫の人気の高いです。新しいショッピングモールへ行くと、ペット同伴可能なスペースがある他、猫カフェがモール内に併設されている所もあります。ただやはり、まだまだ街中には野良猫も多く、ペットショップで飼うような純血統の猫は少数派でして、飼い猫含めてミックス猫が主流です。

昨年まで知り合いの伝手で半年ほど猫の一時預かりをしていた関係でマレーシア赴任後は我が家の猫への愛情が急上昇しています。出かけ先で野良猫を見かける度に「食べ物きちんと食べてるか?」、「水は飲めてるか?」と色々心配になってしまいます。子供たちもすっかり猫好きになってしまい、街中で猫を見つけると、その後の予定を忘れてしまうほど、その場に佇んでしまいます。

こんな猫大国マレーシアですが、最近では外国人や中華系マレー人を中心に犬を散歩させる光景を見かけるようになりました。公園に行くと小型犬だけではなく、大型犬をしかも多頭飼っている飼い主もいます。ペット同伴可能なレストランのテラス席には、テーブルの下や椅子など至る所から犬の顔が出てきます。レストランによっては、犬同士が喧嘩にならないのか心配になるくらい互いが至近距離にいたりしますが、犬と人間が一緒に過ごせる環境が整うことは大変嬉しいことです。これからもマレーシアにこうした施設が増えて行ってもいいものです。

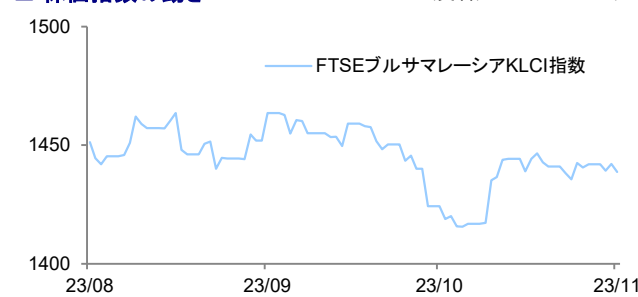
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/6	Foreign Reserves	Sep 29		\$110.1B	\$111.5B
10/12	Industrial Production yoy	Aug	-2.0%	-0.3%	0.7%
10/19	Exports	Sep	-16.5%	-13.7%	-18.6%
10/19	Imports	Sep	-12.1%	-11.1%	-21.2%
10/19	Trade Balance MYR	Sep	21.70B	24.52B	17.31B
10/20	CPI yoy	Sep	2.10%	1.90%	2.00%
10/20	Foreign Reserves	Oct 13		\$108.9B	\$110.1B

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 15800 ~ 16100
 IDR/JPY 0.9174 ~ 0.9524
 JPY/IDR 105.00 ~ 109.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 綱島 正侑記

■ 先月の為替相場

10月のルピアは下落。月初2日、ドルルピアは15400台後半で取引を開始。この日、発表されたインドネシアの9月のCPIの結果は前年比2.28%まで鈍化し、市場予想の2.20%におおむね一致。中銀の定めるインフレ誘導目標2%~4%の下限近くまでの鈍化となったが、前年9月はガソリン価格の改定を受け物価が高水準となったベース効果もあり前年同月比での結果が低く出やすい環境にあったことに加え、9月の中銀会合において2024年のインフレ目標を1.5%~3.5%と引き下げると発表されていたことも影響してか市場の反応は限定的となり15500台前半でクローズ。前月から続く米金利高・ドル高の流れが継続する中、中東情勢の緊迫化もルピア売りに追い打ちをかけドルルピアは15600台を付けた。6日海外時間に発表された米雇用統計の結果が市場予想を大きく上回る結果となったことがドル高に拍車をかけ翌週9日のルピアは15700近辺まで下落。12日、海外時間に入り発表された米CPIの結果は市場の事前予想対比、小幅に上振れる結果。発表直後こそドル買いが進む局面も見られたが、翌13日アジア時間オープンにかけては落ち着いた値動きとなりドルルピアは15700台前半を中心としたレンジ内で推移した。16日に発表されたインドネシアの9月の貿易収支の結果は市場予想を上回る結果となったものの、輸入・輸出ともに事前の予想を下回る内容。前月に続き減速傾向にあることが確認されたが、市場の反応は限定的。18日にかけてドルルピアは15700台前半を中心とした狭いレンジで推移したが、19日オープンにかけ15700台後半までルピアは下落幅を拡大させ取引を開始し15800台半ばまで下落幅を拡大。中銀定例会合の結果では、予想外に利上げが決定され主要な政策金利である7日物リバースレポ金利を0.25%引き上げることと決定し6.0%とした。この結果を受け、ドルルピアはルピア高で反応し一時15800台前半まで値を戻した。しかしながら翌日以降はリスク回避のドル買い・ルピア売りが続き、再度15800台半ばまで反落。翌週23日には15900台半ばを付け、前週に引き続き直近安値を更新したが、海外時間に米金利が大幅に低下したことを受けドルが売られる展開となると、24日はオープン後に15800台前半までドル・ルピア高が進展したが、根強いドル買い・ルピア売りの流れから15800台後半まで反落し、25日にかけて15800台後半での値動きが継続した。26日、米金利が再度上昇に転じたことや月末も近づく中、実需のルピア売りも後押しとなり27日にかけて15900台半ばまで下落。30日にはFOMC会合を控える中、調整と思われる値動きの中15800台後半まで値を戻しクローズした。

■ 今月の見通し

11月のルピアは軟調な値動きを予想。米利上げ長期化、中東情勢の緊迫化によるリスク回避的な値動き等、引続き新興国通貨にとっては逆風となる環境が継続している中、ルピアも軟調な値動きが継続しよう。インドネシア中銀は10月の会合において利上げを決定。利上げについては「世界的な不確実性が高まる中、輸入物価を通じたインフレ率上昇へ対応するための予防的措置」としたが、利上げを通じてもルピア安は収まらず昨年安値を更新し2020年以来となる安値圏で推移している。背景には、足元で悪化している貿易収支があらう。昨年、石炭価格が高騰していた時期の貿易収支から徐々に貿易黒字額は減少しており第二四半期には経常収支も赤字へ転落した。実需によるルピア売り圧力もこれに伴い強まっていると考えられる中、ルピアの先安観は依然として強い印象を受ける。中東情勢の緊迫化もリスクオフによる新興国通貨安という経路以外にも、原油価格高騰による貿易収支悪化という面でもルピア安に影響を与える可能性にも注意が必要か。足元で進行する急激なルピア安に対し、インドネシア中銀は介入、利上げ等を通じて通貨防衛を図っているものの、現時点では通貨安を止められていない。外貨準備高は既に今年前半から減少傾向を維持しており、介入による通貨安防衛もいずれは限界を迎えよう。この先も打ち手に欠く状況が継続するのであれば、アジア通貨危機、新型コロナウイルス感染拡大期に付けた史上最安値である16500近辺も視野に入ってくる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のペット事情』

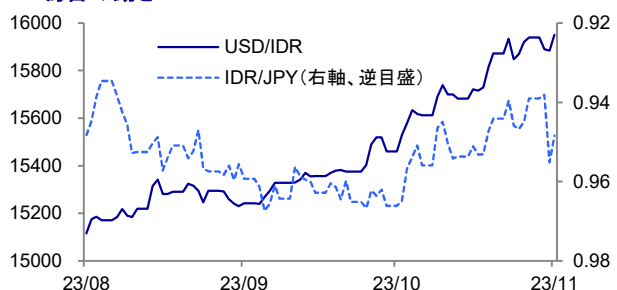
インドネシアで飼われているペット多いのは、圧倒的に猫。とある調査では半数近くの人が猫を飼っているとの結果もあり、猫大国と言っても過言ではないのでしょうか。飼い猫に限らず街中でも野良猫をよく見かけますが、宗教的な背景もあり手厚く扱われているためか、とても人懐っこい猫が多い印象。文字通り「ねこなで声」を出しながらすり寄ってきては餌を要求されます。私はこれまで野良猫に餌をあげたことはありませんが、道端でタムロしている人が餌をあげたりなでたりしているのを見かけることもしばしば。

猫の次に多いのは鳥。インドネシアでは鳥も人気があり、一家に2~3匹を飼うことも普通。軒先に鳥かごを吊るしている民家も多く見かけます。インドネシア人にとって、鳥を飼うことは昔から「地位の高さや豊かさを表すもの」とされているため、文化の一つとして浸透しています。観賞用の鳥市場も存在し、また、鳥の鳴き声コンテスト等も定期的に開催されています。

猫と鳥、一緒に飼うと残酷なことにならないか非常に心配ではありますが、ティダアババ(インドネシア語で問題ない、気にしないの意)なのでしょうかね。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/2	CPI (前年同月比)	9月	2.23%	2.28%	3.27%
10/16	貿易収支 (USD M)	9月	2,349	3,420	3,120
10/16	輸出 (前年比)	9月	-13.70%	-16.17%	-21.21%
10/16	輸入 (前年比)	9月	-5.00%	-12.45%	-14.77%
10/19	BI 7daysリバースレポ金利	-	5.75%	6.00%	5.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 56.00 ~ 57.50
JPY/PHP 0.370 ~ 0.395

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

米政府機関閉鎖回避や堅調な米経済指標のほか、米金融当局者のタカ派発言を受けて、米追加利上げ観測が高まり、ドルが広範囲な強さを見せた一方で、9月の比製造業PMIが前月から改善し、50.6となったほか、9月の比消費者物価指数は前年同月比+6.1%と過去4か月で最大の伸びとなったが、追加利上げ観測が高まるなど、強弱材料が混じるなか、上旬はペソは1米ドル=56ペソ台半ば付近でのレンジ推移となった。しかしながら、イスラム武装勢力のハマスがイスラエルに攻撃したことを受け、中東情勢の緊迫化から、原油先物が急伸したことや、リスクオフからドル買い優勢となり、9日にペソは比金融当局が示唆する防衛ラインの1米ドル=57ペソ手前まで下落した。

中旬に入り、8月の比貿易収支は輸出増から▲41.3億ドルと前月から赤字幅が縮小となったほか、比中銀のレモナ総裁は11月会合での25BPの利上げの可能性を排除しないと発言したことを受けて、ペソは安値から値を戻した。その後は米消費者物価指数の上振れを受けた年内追加利上げ観測が高まりや8月の比海外在留労働者からの送金額が前月から減少となったほか、地政学的リスクが意識されるなか、ペソは上値の重い展開が続き、概ね1米ドル=56.70ペソ台での狭いレンジでの推移が続き、19日には米10年金利が5%に迫るなど、米金利上昇がドルを押し上げたことから、ペソは再度1米ドル=57ペソ付近まで下落したが、この水準ではサポートされた。

米10年金利が再度、5%を試すなど、米金利が上昇に転じたことから、ドルが広範囲な強さを見せた一方で、イスラエルとハマスの戦争は当面拡大しないとの見方が広がり原油先物が大幅下落となったほか、レモナ比中銀総裁は緊急利上げの可能性を示唆するなど、タカ派発言にサポートされ、ペソはレンジ推移継続。9月のフィリピンの財政赤字が拡大したことなどからペソは約3週間ぶりの安値水準の1米ドル=57ペソに迫ったが、引き続き、この水準ではサポートされ、月を通して8月中旬以降からの1米ドル=56ペソ台後半でのレンジを維持。26日に比中銀は物価上昇圧力の高まりを受けて緊急利上げを実施したが、緊急利上げが示唆されていたこともあり、ペソ為替相場への影響は限定的であった。

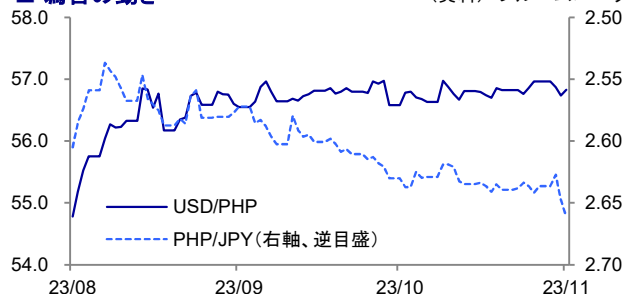
■ 今月の見通し

堅調な米経済指標や米国債の供給増等を受けて、米金利は急上昇してきたが、米金融当局者からは金融市場のタイト化は金融当局による追加利上げの必要性を減らす可能性があるとの見方のほか、現行の景気抑制的な政策を当面維持することが適切との趣旨の発言が相次ぎ、米政策金利はより長期に渡って据え置かれる可能性が高くなっており、ドルは売られにくい環境となっている。また、最近の米国のインフレ指標は、エネルギー価格上昇の影響で上振れしており、米国のインフレは、これまでのようなペースでの低下は期待できず米金融当局がデータ次第とのスタンスを維持しているなか、年内追加利上げの可能も残る。今後、中東情勢が悪化した場合、リスクオフから米金利が低下となる、或いはエネルギー価格上昇を受けたインフレ圧力の高まりから上昇となるのか、見極めが難しい状況である。いずれのケースにせよ、ドルが広範囲に買われる構図になる可能性が高く、当面は中東の混乱が拡大するリスクがに対して予断を許さない状況下、ドルは底堅い推移を続けるであろう。

比中銀は足許4か月連続でインフレが加速したことを受けて、リスクは引き続き上方向にあるとの認識のなか、緊急利上げを実施し、引締め姿勢を維持している。米金利上昇や安全資産としてのドル買いを要因としたペソ安懸念が燃えるなか、ペソ下落を阻止するために、更なる利上げが必要となる可能性が高く、レモナ総裁は11月会合での追加利上げについて示唆している。しかしながら、利上げは短期的にはペソの一定のサポートとなり得るが、ドル主導の相場展開のほか、中長期的な経済活動への影響を鑑みると、ペソサポート効果は限定的との見方は変わらず。一方、レモナ総裁はペソ安定化・更なる下落防止の為に必要に応じて介入を実施すると述べており、金融当局者が想定しているドルペソのレンジ上限の1米ドル=57ペソが今後も防衛ラインとなると考えられる。需給面に目を向けると、今後も内需の底堅さやペソ安の影響、加えて原油価格の高止まり観測からフィリピンの貿易赤字が高水準で継続し、ペソが売られやすい環境が続く可能性が高い。海外在留労働者からの送金が増加する季節性からペソが強含む局面も想定されるが、ペソ高にトレンド転換する材料に乏しいなか、ペソはレンジ推移継続となる公算が高い。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 82.70 ~ 83.60
INR/JPY 1.75 ~ 1.87

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【10月の米ドル/インドルピーは節目83水準を超えた水準で横ばい】

83台前半水準にて当月取引を開始。月初より、節目の83水準を超えた水準での推移が続いていたものの、83.25水準を上回る局面では、RBIからの上値抑えの為替介入は引き続き見られており、過度なルピー安を留める姿勢は不変のまま。月中にかけては、USD売り圧力の流れに水準感を落としつつ、加えてフロー主導でのじり高で調整する動きに。月末にかけては、USD高圧力に連れられて徐々に反転し、再び83.28水準までルピー安の展開となるも、同水準からのRBIによる為替介入はしっかり散見され、上昇圧力に歯止めをかける格好。結局、節目83水準前半と月初水準からは小幅にルピー高水準でのクローズとなった(23日時点)。

SENSEXは、9月の調整局面の流れから、一時65,000水準を下回る水準まで下落したものの、その後は下値の堅さも見られながら、一転上昇圧力に転じる展開。66,500水準を超える水準まで一旦は上昇基調となるも、その後は上値追いに乏しく、再び65,000水準を下回る水準まで調整したことで、月を通しては、上下に往って来いの値動きとなった。

インド経済指標では、9月製造業/サービス業PMIは強弱ミックスの結果に。注目された10月金融政策委員会(MPC)は、4会合連続となる政策金利据え置き(6.50%)を実施。一方、政策スタンス(インフレ退治に向けた利上げ路線継続)は、不変のままとした。9月消費者物価指数(CPI、前年比)は、+5.02%と前回の+6.83%から鈍化。9月貿易収支は赤字幅は縮小したものの赤字常態化は継続、通貨として売られやすい立ち位置は変わっていない。

■ 今月の見通し

【11月の米ドル/インドルピーは引き続き83水準近傍での攻防か】

11月においては、節目83水準近傍での上値の重い展開を見込む。10月は、節目である83水準を小幅に上回る水準での値動きが継続したものの、RBIからの為替介入による上値抑えの姿勢は継続しており、加えてフロー主導でのUSD売りINR買いの動きも見られている中で、過度なルピー安の流れには至っていない状況。今後、ルピー安の流れが緩やかに続く場合は、従前のレンジである82~83水準の世界から、83~84水準の新たな世界への移行も視野に入れておきたいが、目線感としての節目83水準は、一旦維持しておきたい。

10月MPCでは、政策金利6.50%の据え置きを実施。直近のCPIデータ上は、インフレターゲットの上限6.0%の上方に位置していたことから、リスク警戒としての再度利上げ転換を想定していたものの、当該水準ですらも、全会一致での据え置き措置を取ってきている状況。加えて、9月CPIは、インフレターゲット上限を下回る水準まで鈍化し、併せて、インフレ見通しも小幅に軟化させてきたことから、今後は、米国同様にタカ派的な現状維持という方向感に舵を切りつつあるのかもしれない。

来年以降、インド国債組み入れに伴う資金流入の加速や米経済の失速・利下げ議論の再燃となれば、ルピー高の流れが顕在化する局面が訪れる方向感で見ておくが、その際は、RBIからの下支えの為替介入や実需勢からのアウトフロー(インドルピー売り)により、緩やかにダイレクションはルピー安方向に回帰していく想定を、中長期的には控えておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のペット事情』

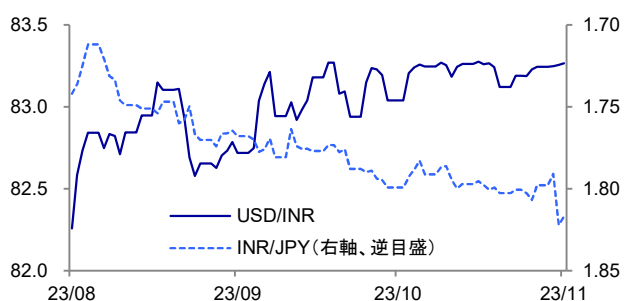
インドの街角には牛がいる。バンガロールは人口1300万人の大都会だが、路肩や中央分離帯、空き地、川沿いなどに毛色・サイズさまざまな牛たちの姿がある。数頭で歩いたり、座っていたり、大きな声で鳴きながらさまよっていたり、道路を横断していたり、ゴミを漁っていたりする。八百屋の店頭で商品をくすねる牛も見たことがある。

街角の牛には飼い主がいるケースも存在するが、多くは見捨てられた野良牛だと言われている。乳牛を飼う小規模農家が牡牛を持て余して街に放してしまうそう。

牛が道路を横断し始めると車やオートバイは辛抱強く待っている。街灯が少ない住宅地や郊外では、夜の野良牛は大変危険だ。私の友人も黒い牛と衝突事故を起こしてしまい、しばらく通院していた。亡くなった野良牛の回収は市政府や近隣住民の大きな負担でもある。バンガロール市政府も野良牛問題には頭を痛めており、郊外への移送も一部行われているようだが、根本的解決策は見つかっていない。
(バンガロール 木原志乃)

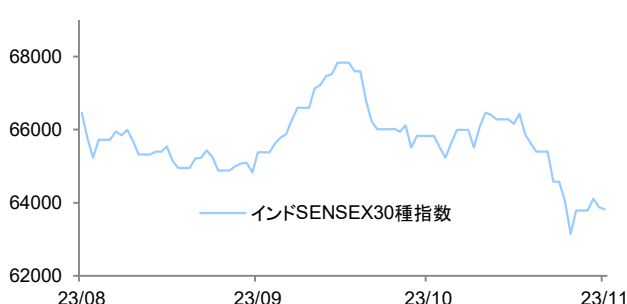
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
10/3	製造業PMI	9月	-	57.5	58.6
10/5	サービス業PMI	9月	-	61.0	60.1
10/6	政策金利	10月	6.50%	6.50%	6.50%
10/12	鉱工業生産	8月	9.10%	10.30%	6.00%
10/12	CPI	9月	5.40%	5.02%	6.83%
10/16	貿易収支	9月	-23,200	-19,377	-24,154

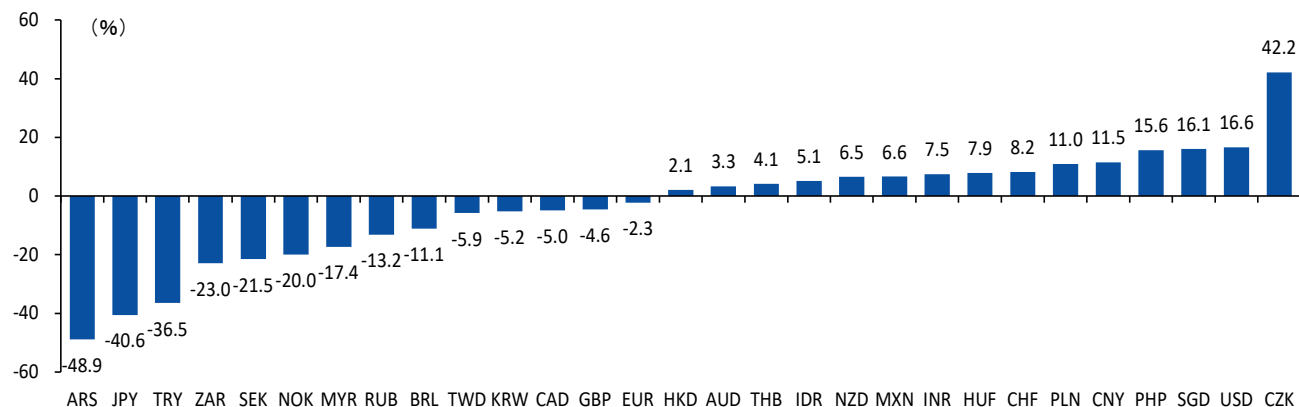
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2022年末	2023年10月末	騰落率	株式市場	2022年末	2023年10月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	33147.25	33052.87	-0.3%	-
日本	USD/JPY	131.12	151.68	15.7%	日経平均株価	26094.5	30858.85	18.3%	2.2%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0705	1.0575	-1.2%	ドイツDAX指数	13923.59	14810.34	6.4%	6.4%
英国	GBP/USD	1.2083	1.2153	0.6%	ロンドンFTSE100指数	7451.74	7321.72	-1.7%	-2.3%
豪州	AUD/USD	0.6813	0.6337	-7.0%	S&P/ASX200指数	7038.688	6780.678	-3.7%	3.6%
カナダ	USD/CAD	1.3554	1.3875	2.4%	S&PTロント総合指数	19384.92	18873.47	-2.6%	-4.9%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.8986	7.3165	6.1%	上海総合	3089.258	3018.771	-2.3%	-7.9%
香港	USD/HKD	7.8016	7.8239	0.3%	香港ハンセン	19781.41	17112.48	-13.5%	-13.7%
インド	USD/INR	82.735	83.2562	0.6%	インドSENSEX30種	60840.74	63874.93	5.0%	4.3%
インドネシア	USD/IDR	15573	15885	2.0%	ジャカルタ総合	6850.619	6752.211	-1.4%	-3.4%
韓国	USD/KRW	1260.33	1350.83	7.2%	韓国総合株価	2236.4	2277.99	1.9%	-5.0%
マレーシア	USD/MYR	4.4045	4.7635	8.2%	ブルサマレーシアKLCI	1495.49	1442.14	-3.6%	-10.8%
フィリピン	USD/PHP	55.741	56.735	1.8%	フィリピン総合	6566.39	5973.78	-9.0%	-10.6%
シンガポール	USD/SGD	1.3395	1.3697	2.3%	シンガポールST	3251.32	3067.74	-5.6%	-7.7%
台湾	USD/TWD	30.73	32.401	5.4%	台湾加権	14137.69	16001.27	13.2%	7.3%
タイ	USD/THB	34.608	36.154	4.5%	タイSET	1668.66	1381.83	-17.2%	-20.7%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2023年9月時点)



■ 実質GDP成長率

	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2021	2022
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	-2.0	-0.6	2.7	2.6	2.2	2.1	4.9	5.8	1.9
日本*	-2.3	5.3	-1.2	0.2	3.2	4.8		2.4	1.1
ユーロ圏	5.4	4.1	2.4	1.8	1.2	0.5	0.1	5.9	3.4
英国	11.4	3.9	2.1	0.7	0.5	0.6		8.7	4.3
豪州	3.0	3.1	6.0	2.7	2.4	2.1		5.3	3.7
カナダ*	2.6	3.6	2.3	-0.1	2.6	-0.2		5.2	3.5
エマージングアジア									
中国	4.8	0.4	3.9	2.9	4.5	6.3	4.9	8.4	3.0
香港	-3.9	-1.2	-4.6	-4.1	2.9	1.5	4.1	6.4	-3.5
インド	4.0	13.1	6.2	4.5	6.1	7.8		6.5	9.1
インドネシア	5.0	5.5	5.7	5.0	5.0	5.2		3.7	5.3
韓国	3.1	2.9	3.2	1.4	0.9	0.9	1.4	4.3	2.6
マレーシア	4.8	8.8	14.1	7.1	5.6	2.9	3.3	3.1	8.7
フィリピン	8.0	7.5	7.7	7.1	6.4	4.3		5.7	7.6
シンガポール	4.0	4.5	4.0	2.1	0.4	0.5		9.1	3.7
台湾	3.9	3.0	3.6	-0.8	-3.3	1.4	2.3	6.5	2.4
タイ	2.2	2.5	4.6	1.4	2.6	1.8		1.5	2.6

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	23/02	23/03	23/04	23/05	23/06	23/07	23/08	23/09	2021	2022
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.6	3.5	3.4	3.7	3.6	3.5	3.8	3.8	5.4	3.6
日本	2.6	2.8	2.6	2.6	2.5	2.7	2.7		2.8	2.6
ユーロ圏	6.6	6.5	6.5	6.5	6.4	6.5	6.4		7.7	6.7
英国	3.8	3.9	3.8	4.0	4.2	4.3			4.6	3.7
豪州	3.5	3.5	3.7	3.6	3.5	3.7	3.7	3.6	5.1	3.7
カナダ	5.0	5.0	5.0	5.2	5.4	5.5	5.5	5.5	7.5	5.3
エマージングアジア										
中国									3.9	
香港	3.3	3.1	3.0	3.0	2.9	2.8	2.8	2.8	5.4	4.3
インドネシア	5.5								6.4	5.9
韓国	2.6	2.7	2.6	2.5	2.6	2.8	2.4	2.6	3.6	2.9
マレーシア	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.4	3.4		4.6	3.8
フィリピン	4.8	4.7	4.5	4.3	4.5	4.8	4.4		7.8	5.4
シンガポール	1.9	1.8	1.8	1.9	1.9	2.0	2.0	2.0	2.7	2.1
台湾	3.6	3.6	3.6	3.5	3.5	3.4	3.4	3.4	4.0	3.7
タイ		1.1			1.1					

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	23/01	23/02	23/03	23/04	23/05	23/06	23/07	23/08	23/09	2021	2022
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	6.4	6.0	5.0	4.9	4.0	3.0	3.2	3.7	3.7	4.7	8.0
日本	4.3	3.3	3.2	3.5	3.2	3.3	3.3	3.2	3.0	-0.3	2.5
ユーロ圏	8.6	8.5	6.9	7.0	6.1	5.5	5.3	5.2	4.3	2.6	8.4
英国	10.1	10.4	10.1	8.7	8.7	7.9	6.8	6.7	6.7	2.7	9.1
豪州			7.0			6.0			5.4	2.9	6.6
カナダ	6.3	5.9	5.2	4.3	4.4	3.4	2.8	3.3	4.0	3.4	6.8
エマージングアジア											
中国	2.1	1.0	0.7	0.1	0.2	0.0	-0.3	0.1	0.0	0.9	2.0
香港	2.4	1.7	1.7	2.1	2.0	1.9	1.8	1.8	2.0	1.6	1.9
インド	6.5	6.4	5.7	4.7	4.3	4.9	7.4	6.8	5.0	5.1	6.7
インドネシア	5.3	5.5	5.0	4.3	4.0	3.5	3.1	3.3	2.3	1.6	4.2
韓国	5.2	4.8	4.2	3.7	3.3	2.7	2.3	3.4	3.7	2.5	5.1
マレーシア	3.7	3.7	3.4	3.3	2.8	2.4	2.0	2.0	1.9	2.5	3.4
フィリピン	8.7	8.6	7.6	6.6	6.1	5.4	4.7	5.3	6.1	3.9	5.8
シンガポール	6.6	6.3	5.5	5.7	5.1	4.5	4.1	4.0	4.1	2.3	6.1
台湾	3.1	2.4	2.4	2.4	2.0	1.8	1.9	2.5	2.9	2.0	3.0
タイ	5.0	3.8	2.8	2.7	0.5	0.2	0.4	0.9	0.3	1.2	6.1

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2021	2022
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.4	-3.8	-3.9	-3.8	-3.7	-3.4	-3.2	-3.5	-3.8
日本	3.9	3.7	3.1	2.4	2.1	1.7	2.2	3.9	2.1
ユーロ圏	2.8	2.1	1.0	-0.2	-0.6	-0.4	0.2	2.8	-0.6
英国	-0.5	-2.3	-3.5	-3.3	-3.1	-1.8	-1.8	-0.5	
豪州	3.0	2.2	1.9	0.9	1.1	1.4	1.2	3.0	1.1
カナダ	-0.3	-0.1	0.2	-0.1	-0.3	-0.6	-1.0	-0.3	-0.3
エマージングアジア									
中国	2.0	2.0	2.1	2.4	2.4	2.2	2.2	2.0	2.2
香港	11.8	12.6	10.9	11.6	10.5	8.9	9.2	11.8	10.5
インド	-1.1	-1.2	-1.9	-2.6	-2.4	-2.0	-1.7	-1.1	-2.4
インドネシア	0.3	0.4	0.9	0.8	1.0	1.1	0.7	0.3	1.0
韓国	4.9	4.6	4.1	2.9	1.9	0.6	0.5	4.7	1.8
マレーシア	3.9	3.4	2.7	2.5	3.1	3.0	3.3	3.9	3.1
フィリピン	-1.8	-2.8	-4.6	-5.9	-4.6	-4.5	-3.3	-1.8	-4.4
シンガポール	18.0	19.8	20.1	20.3	19.3	18.5	18.1	18.0	19.3
台湾	15.2	15.6	14.8	14.2	13.4	12.1	11.9	15.2	13.4
タイ	-2.1	-2.1	-3.1	-3.7	-3.2	-2.3	-1.4	-2.1	

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	5.25-5.50	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/7/26	+25bp	2023/9/21	現状維持
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2023/10/31	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	4.00	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2023/9/14	+25bp	2023/10/26	現状維持
英国	バンク・レート	5.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2023/8/3	+25bp	2023/9/21	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	4.10	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/6/6	+25bp	2023/10/3	現状維持
カナダ	翌日物金利	5.00	引き締め: 2022/3/2	0.25	2023/7/12	+25bp	2023/10/25	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.45	緩和: 2012/6/8	6.31	2023/8/21	-10bp	2023/10/20	現状維持
香港	基準貸出金利	0.50	緩和: 2007/9/19	6.75	2008/12/17	-100bp	2011/12/14	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2023/10/6	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	6.00	引き締め: 2022/8/23	3.50	2023/10/19	+25bp	2023/10/19	+25bp
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2023/10/19	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	引き締め: 2022/5/11	1.75	2023/5/3	+25bp	2023/9/7	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.50	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/10/26	+25bp	2023/10/26	+25bp
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.875	引き締め: 2022/3/17	1.125	2023/3/23	+12.5bp	2023/6/15	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	2.50	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/9/27	+25bp	2023/9/27	+25bp
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp	2023/5/23	-50bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行